上は首が飛ぶ』といふ諺さへあつたくらゐで、多くの金を盗めば刑が重かつたのであるが、金高の多少によつてのみ刑の輕重を定むべきものではない。刑罰を行ふに當つては先づ刑罰なるものは不正を爲した者に反省を促す爲であることを考へなければならぬ。第二には其の社會に及ぼす害毒を防ぐことも目的の一つと考へられる。第三には之を社會多數の人に示して豫め不正を爲さぬやうに警むるといふことも目的の一つと考へられる。若し此等のことを考へずに、唯だ罪を犯した者を憎み、之に苦みを與へて復讎をしやうといふ考へでやるならば、所謂暴を以て暴に代ふるものであつて、眞の刑罰とはいはれぬのである。又罪を犯す者を出したに就ては社會一般の人にも其責があることをよく考へて見なければならぬ。

前の章に於ては如何に偉大なる人と雖も一つの力のみを以て其の偉大を成したのでなく、必ずその時代の影響を受けて居るものであるといふ事を

罪を犯すものと其の境遇

説いたが、罪を犯すに就ても同樣のことが考へられなければならぬのである。社會が不健全であつて、いかに正しい行ひを續けても其の結果が現はれぬといふ有樣であれば、私欲を遂ぐるために如何なる手段をも擇まぬといふやうな人が多く出るのは已むを得ぬことである。周圍の事情の如何に拘はらず其の操守を枉げぬといふのは誠に貴いことであるが、凡ての人に此の如き高尚な行ひを求めるのは無理である。盗むもの殺すもの欺くものは確かに罪人であるが、さういふ人達を多く出したのは社會が健全でない爲であると考へなければならぬ。又人々は他の罪を犯す者を見た時に、『若し自分があの境遇に居て、あの罪を犯さずに濟んだであらうか』と反省して見なければならぬ。余は前年自分の曾て同じ學校に居た人が或る地方の官吏となつて居る間に、多くの賄賂を取つて告訴された事を聞いた時に、何といふ淺ましいことをする奴であらうと、大に憤慨した。その時には賄

賂を取つた彼と賄賂を取らぬ自分との間には非常なる懸隔があるやうに思つたのである。ところが後になつて考へて見ると、余の家へは誰も賄賂などを持つて來る者はないのである。誰も賄賂によつて余を味方にする必要を感じて居るものは無いから、持つて來やう筈はない。さうして見れば自分が賄賂を取らぬからとて少しも誇る事は出來ぬ。若し自分の所へ澤山賄賂を持ち込まれても、それを盡く斷るだけの勇氣を自分はもつて居るか。此點に就て深く反省することなく、他人の罪を責めるのは耻づべき所行といはなければならぬ。

嚴重なる社會制裁の行はるゝことは、社會を健全に發達せしむるために何よりも必要である。しかし其の制裁が專ら形式的のものになつては、また取返しのつかぬやうな弊害を生ずるであらう。非常に嚴格なる親の子に不良少年が出來るのは珍しくない事實である。それは形の上だけが嚴格で

各個人の反省

あつて誠心が之に伴はぬからである。親が自ら省みて過失があるならば、子に對して叱言をいふのは耻しいことでなければならぬ。その反省が足らずして形の上だけ嚴格にすれば、親の面前でだけおとなしくして居て、蔭では勝手なことをするやうな子が出來るのも據ないことである。社會制裁に就ても之と同樣の考慮が大切である。社會を健全に保つための根本義は社會を組織する各個人の反省と努力でなければならぬ。社會が複雜になればなる程、此點に就ての用意が肝要である。

第十四章　反省と慚愧

ヨハネ傳に記する所によると、耶蘇が橄欖山へ行つた時に、一人の姦淫を犯せる婦人を多勢が其處へ連れて來て『師よ此婦は姦淫を爲し居る時そのまゝ執へられし者なり。此の如き者を石にて擊殺すべしと、モーセの律

耶蘇と不義の女

法の中に命じたり。汝は如何に言ふや』と尋ねた。耶蘇は容易に之に答へなかつたが、人々の強いて問ふによつて『爾等のうち罪なき者先づ彼を石にて擊つべし』と答へたので、その良心に責められて老人を初め少者まで出て行つた。そこで耶蘇は彼の婦人に近づいて『爾を訴へし者は何處へ行きしや、爾の罪を定むる者なきか』と問うたところが『誰もなし』と答へた。耶蘇は『我も爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す勿れ』とて之を放ち遣つたといふことである。此の耶蘇の一言は實に急所を突いて居る。他人を石で擊つ前に、先づ自分が石で擊たれぬものであるか否かを考へて見なければならぬのである。

形の上に現はれた罪ばかりが罪ではない。心の中を外から覗いて見る人が無いから無事にすむやうなものゝ、若し吾等の心が外から分るものであつたら如何に見苦しいものであらうか。各自に此點に就て反省することが

内と外との相異

大切である。これは今より十年あまり前の事であるが、帝國ホテルで催された或る祝賀會に招かれて出席した歸途、日比谷あたりを散歩して居る間に懷中物を摽られて無一物になつてしまつた。電車の切符も無い。しかし急ぐ用も無かつたので、ブラ〳〵歩いて青山の宅まで歸つて來ると、赤坂見附あたりで客待ちをして居る車夫が頻りに車に乘れといつて勸める。それを聞き流して歩きながら余は心の内に頗る面白く思つた。自分はフロックコートを着て高い帽子を被つて居る。彼の車夫は股引に袢天である。外から見ると自分の方が彼の車夫より幾分か多くの金をもつて居さうに見えるであらう。しかし實際は自分の懷には一文も無いが、あの車夫は幾分か持つて居るのである。彼は己よりも金のある人と思つて乘車をすゝめて居るのであらうが、若し己より貧しい人と知つたら驚くことであらう。

斯んな事を考へて歩きながら、余は圖らずも或る宣教師のいつた言を思

渡し守

ひ出した。（それは多分カアデナル・ニューマンであつたと思ふが確かでない）其人は自分を渡し守に譬へてツク〴〵述懷して居る。渡し守は多くの人を船へ乘せて向ふの岸へ渡してやる。向ふの岸へ着いた人は、それから前の方へいくらでも進んで行く。しかし渡し守は元の岸へ船を返しては又新なる人を向ふの岸へ送るのみで、自身はいつ迄も向ふの陸を踏むことは無い。自分もそれと同じやうに、多くの人に神の敎へを說いて正しい道に入らしめたけれども、自身は依然として迷ひの境界を離れられぬのが悲しいといふのである。斯ういふ反省はまことに貴い。法句經の中にも此と同じやうな意味で反省を敎へて、

若し多少聞くこと有るも、自ら大にして以て人に憍れば、是れ盲の燭を執るが如く彼を照すも自ら明ならず。

といつてある。人に道を說きながら自ら實行の出來ぬのは、盲人が燭を執つて他の人を照しながら自ら何物をも見ることが出來ぬと同樣である。人の罪を犯したのを非難して、自分は曾て罪を犯したことは無いと誇つて居ても、若し自分の心の中に暗い影がさして居るのを氣付かぬなら、矢張り燭を執つた盲人の類である。

氣のつかぬ心の暗影

自分で氣のつかぬ間に、自分の心にはいろ〳〵暗い影がさして居る。サミュル・ジョンソンの作の『ラセラス傳』の中に、ラセラスといふ極めて聰明なる王子が人生の問題に就てさま〴〵に思ひ惱むさまが頗る興味多く書かれてある。王子は至て情に篤い人であつて、世間に生活難に陷つて居る者の多いことを聞いて非常に同情し、他日自分が王位を嗣いだなら、其等のあはれな者を救ふために出來るだけの設備をしてやらうと、種々の計畫を立て見た。さういふ事の豫想を續けて居るうちに、之を實行する日が少しも早く來ればよいと頻りに思ひつめたが、俄然として我に歸つた。『一

體今まで自分は何を考へて居たのだらう。自分は父王の死によつて初めて王位を嗣ぐ身分になるのではないか。自分が王位を嗣ぐことを急ぐのは、卽ち父王の死の近からんことを望むのではないか。嗚呼自分は何といふ淺ましいことを考へて居たのであらう』と王子は覺えず身ぶるひしたといふことが書いてある。

實際此の王子は生活に惱むものを救つてやりたいといふ考へより外に、何にも惡い心をもつて居たのではないが、不用意の間に斯んな間違つた考がその心を侵して來て居たのである。王子ラセラスの如きは至て聰明な人であつたから、早くそれに氣付いたのであるけれども、モツト平凡な人ならば容易に自ら反省せず、暗い影はズン〳〵大きくなつて行くであらう。されば吾等はいつでも『汝は何を思つてゐるか、又何をして居るか』といふ問に答へられるだけの覺悟をもつて居なければならぬのである。舊約全書の創世記に、アダムと其妻イヴが神の禁じた樹の果を食つた事がある。最初は二人共に裸體で少しも愧ぢなかつたが、此の果を食つてから急に耻しくなつて木のかげに隱れたとある。そこへ神が現はれて來た。

汝は何處に居るや

彼等園の中に日の涼しき時分歩みたまふエホバ神の聲を聞きしかば、アダムと其妻卽ちエホバ神の面を避けて、園の樹の間に身を匿せり。エホバ神アダムを召て之に言ひたまひけるは、汝は何處に居るや。彼いひけるは、我園の中に汝の聲を聞き、裸體なるにより懼れて身を匿せり。此の『汝は何處に居るや』といふ一語は、いかに恐ろしくアダム夫婦の耳に響いたことであらう。此の問に對して、少しも恐れ憚らず答へ得るものならば、彼は如何なる人の如何なる問にも答へ得るものである。

今吾等は斯る問を耳に聞いて居ないと思つて氣を緩めて居るけれども、實は常に此聲を聞いて居るのである。誰でも靜かに坐して、自ら心を沈着

本心の聲

けて見るならば『汝何處に居るや』の聲が聞える筈である。之に對して隱さず繕はずして、而も耻しからぬ答へが出來るやうに、いつも心を持つことが大切である。外面を裝うて正人君子として世を渡る事は出來やうが、心の底に響いて來る『汝何處に居るや』の問に答へられぬならば、まことに賴りない事ではないか。カントは言つた。

吾等をしていつも肅然として襟を正さしむるものは、晴れたる空の星影と、吾等が本心の聲である。

此の本心といひ、良心といふものゝ本質に就てはいろ〳〵學者の間に說のあることで、後の章に於て多少說明を下して見たいと思ふが、兎も角も吾等は自分に制裁を與へ、自分に警告を與へる聲を吾等の心の底に聞くことが出來る。此の事實は動かぬものである。ウツカリ氣が緩んで居る時は、それに氣付かぬけれども、靜かに獨り想ふ時此聲は響いて來るのである。

自分をゆるさぬ

斯ういふ嚴肅な氣分になつて見ると、輕々しく人を咎めることは出來なくなる。前章に於ては、自己の權利を主張し、他人の不正を許さぬのは自己一身の爲ではない、卽ち社會を健全にする所以であるといふことを說いた。それは勿論必要なことなのである。吾等は社會の一員として社會を健全にする務めを身に負うて居るのであるから、その責を果すために力を惜んではならぬ。しかし他人の不正を許さぬといふばかりではいかぬ、自分で自分の不正を許さぬといふ嚴かなる覺悟がなければならぬのである。斯く人の不正をゆるさず、自己の不正を許さぬといふ心をもつた人の力によつて、眞の社會の革新が行はれるのである。西班牙の諺に

能く改むるものは神之を助く。

といふのがある。それは能く改むる者は、先づ自ら改めて而して後に他の改むることを促すからである。何事に就ても革新を唱へる人は、他人の缺

維新の大業を明治天皇

點を指摘して之を改めさせやうといふやうな態度であつてはならぬ。『共に慚愧の念を起し、共に改め、共に新にならう』といつて人々を勸め促す所の態度でなければなれぬのである。

明治維新の改革は多くの英傑の力によつて爲し遂げられたのであるが、上に英邁なる明治天皇を奉戴することを得なかつたなら、其等の英傑の努力も恐らくは空に歸したであらう。而して明治天皇が維新の大業を完成せらるゝに當つて、如何なる態度を御取りになつたか。明治元年三月の御宸翰がよく之を證據立て居る。その御宸翰に於て、明治天皇は

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪へざるなり。

と仰せられ、更にまた

近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り、獨我邦のみ世界の形勢に疎く、舊習を固守して一新の效を計らず、朕徒らに九重中に安居し一日の安きを偸み百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。

と仰せられてある。天皇が斯く自ら責め自ら勵むといふ態度を以て衆を率ゐられたればこそ、維新の大業は完成せられたのであると、吾等はまことに感激に堪へぬのである。

世界はいつも動いて居る。吾等は日に新に日に進むことを心懸けなければならぬ。而して日に新になり日に進んで行くといふ、此の華々しい活動は吾等が互ひに相戒め相勵ますことによつて生み出さるべきものである。斯の嚴肅なる氣分無くして、唯だ華々しい活動をのみ望むならば、その活動は久しからずして頓挫するに違ひない。

世若し人ありて能く慚愧することを知らば、是れ誘進し易し、良馬に策

つが如し。――孚經

といふはまことに名言である。『是で宜い』と安心してしまへば、それで行き止りである。『是ではならぬ』と思へばこそ、更に新なる道を求めて進むことも出來るのである。慚愧といふは卽ち自ら足れりとせざる心である。是こそは新しい力を生み出すものである。慚愧とか懺悔とかいふと、極めて消極的のことのやうに思ふ人も少くないやうであるが、決してさうでは無い。

日に新にする道

湯の盤の銘に曰く、苟に日に新に、日々に新にして又日に新なりと。康誥に曰く、新民を作すと。詩に曰く、周は舊邦と雖も其命これ新なりと。是故に君子は其極を用ゐざる所なし。――大學

といふは極めて舊い語であるが、いつも新しい教訓を吾等に與へる。

世の中が如何に進歩したといつても、決して滿足なものはない。まだまだ限りなく進まなければならぬ。日に新になるといふ必要は此處に存するのである。吾等は不完全なものであるが、而も完全を求めて已まぬのである。此の完全を求めて已まぬといふ心が吾等を勵まして、何事にも身心の力を傾倒せしむるので、『其極を用ゐざる所なし』といふは卽ち此ことである。今日吾等が一歩を進めるのは、昨日までの吾等の生活を『不完全なもの』として否定する所から起るのである。吾等は日毎に吾等の爲した所を否定して、更に新なるものを求める。之によつて人生の進歩がある。實に貴むべきは否定の力である。否定といへば消極的のことであるが、此中から積極的に進んで行く大なる力が生れるのである。普賢經には『大莊嚴懺悔』といふ語がある。懺悔といふ至てじみな事に大莊嚴といふ形容詞を冠するのは不似合なやうに思はれるが、よく考へて見ると懺悔ほど美しく貴いものはない。大莊嚴といふ形容詞の冠せられてあるのは尤もなことであ

否定の力

強弩の末

る。

深く内に省ることが大きく外へ伸る力を作るのである。『強弩の末魯縞を穿たず』といふ諺がむかしの支那にあつた。強き弩の力を以てすれば如何なる物でも貫くことの出來る筈である。しかし如何なる弩でもその力には限りがある、その力の盡きたる末に於ては極めて薄い織物に孔を穿つことすら出來なくなる。何でも力に任せて伸びてのみ行かうとすれば、必ず力の盡きる時が來る。それで常に自ら反省し、強弩の末とならぬやうに意を用ゆる必要がある。これは一個人でも一國民でも同じことである。一代の英傑豐太閤も六十三歳を一期として伏見城中に死んだ時の有樣は氣の毒なものであつた。その辭世として傳はつて居る、

露とおき露と消えぬる我身かなにはの事も夢のまたゆめ

の一首を見ると、賤ヶ岳の勝利の時中川清秀を呼びかけて『瀨兵衞太儀』と一喝した人とは全く別人の感がある。殊に五大老等に涙を垂れ頭を低くして遺子秀頼のことを頼み、必ず遺託に背くまいといふ誓紙を出させて安心したなどは如何にも太閤らしくない。その毛利輝元に遺はした遺言狀を見ると、

秀頼事成立ち候やうに、此書付の衆（家康輝元等五人のこと）と、しん頼み申候。何事も此外は思ひのこす事なく候。返す々々秀頼事頼み申候五人の衆頼み申候。委細五人のもの（石田三成等五奉行のこと）に申渡し候。名殘惜しく候。以上。

とある。宛らに愚痴なる老女の繰り言である。數十年來隱忍して時機を待つて居た德川氏等の野心を、斯んなことぐらゐで抑へ得られると思つたのであらうか。眞に強弩の末とは此事と思はれる。

徒らに古英雄の缺點を數へんとするのではない、吾等は此等の事によつ

て反省の必要を充分に敎へられると考へるのである。調子に乘り過ぎて內に省みる事を忘れた人が一たび衰境に入つた時の痛々しさは何とも形容が出來ぬ。誰でも折々は自ら省み自ら責めて、出直しをする事が肝要である。

一屈一伸

易に『尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり、龍蛇の蟄するは以て身を存するなり』とあるは至言である。東北地方の檜山などへ冬の最中に行つて見ると、何丈もある高い檜が皆雪の中に降り埋められて靜まり返つて居るのであるが、又五六月の頃に行つて見ると、何れの枝にも皆若葉が萠えて居る。その若葉の勇ましく伸びて行くさまはまことに目の覺めるやうである。此の有樣を見て初めて久しい間雪の中に埋まつて居たのが無益でなかつたことが知られる。寒さの爲に抑へられて居た力が春にあつて目覺しく伸びるのである。斯く强く抑へられ、又勇ましく伸びるといふ變化の間に檜の良材が育て上げられるものと思はれる。人生の事もまた常に此の如くなるべきである。深く反省して大に懺悔し、甘んじて苦を受け難を忍ぶといふ覺悟が出來て、そこに新なる發展の途が開かるべきである。

懺悔に就ての誤解

然るに此の懺悔といふことに就ては甚しい誤解があつて、之によつて生ずる弊害は夥しいものである。懺悔によつて如何なる罪も消えるといふことを宗敎家がよくいふのであるが、若し『惡かつた御免下さい』といふだけで凡ての罪が消えるものなら、誰も自分の行爲に對して責任を負ふ必要はなくなる。斯の如き思想は社會の墮落を促すのみである。懺悔するといふことは唯だ『御免なさい』といつて詫びることではない。今までの誤れる生活を自ら否定して、新なる生活に入らんと固く誓ふことである。基督敎に於ては懺悔といふことを極めて大切に考へてゐるのであるが、耶蘇は決して神の前へ出て唯だ其の赦しを乞ふ事を勸めたのではない。それは彼の言に『人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ』といひ、或は『神

の其子を世に遣はし給へるは世を審判んとに非ず、彼によりて世を救はんが爲なり』とあるによつても明である。新に生るゝといふは新なる心となる事である。卽ち今までの誤れる生活を自ら否定して、新なる生活に入ることである。又神が耶蘇を此世へ送られたのは、人類の今までの罪を責めて謝罪させやう爲ではない、之を敎へ導いて新なる生活に入らしめんが爲だといふのである。『悔い改めよ』といふことは斯くて初めて意義があるわけである。むかしダビデが神に祈つた言葉に『惡きものより我が靈魂をすくひ給へ。エホバよ、手をもて人より我をたすけ出し給へ』とあるのも此に思ひ合せて頗る意義の深いものになつて來る。

懺悔は更生である

形だけの懺悔

然るに敎への初めの精神が漸く失はれ、形式のみが重んぜらるゝやうになると、神の前にひれ伏して罪を謝するとか、救ひを祈るとかいふことは盛にやるけれども、心は少しも淸くならず、罪で充されて居るといふやうな人が多くなつた。罪を悔いたといふ以上は、罪の生活から離れて居なければならぬのに、唯だ罪を悔いたといふことを誇りとして、實は日毎に罪を作つて居る。皮肉なる詩人クーパーは此等の徒を批評して、

彼等は自分の謙遜であるといふことを誇つて居る。

といつた。短い語ではあるが能く急所を突いて居る。耶蘇は『爾祈る時は僞善者の如くする勿れ。彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立ちて祈ることを好む。……爾祈る時は嚴密なる堂に入り、戸を閉ぢて隱れたるに在す爾の父に祈れ』と敎へた。又『我をよびて主よ主よといふ者盡く天國に入るに非ず』とて、心が淨くならなければ形や口先の信仰は何の役にも立たぬと戒めた。然るに後には此の精神が全く失はれ、人に見せるために祈る者のみ多くなつた。羅馬敎會が盛になつて種々の弊害の起つて來ると共に、祈禱や懺悔も愈々形式的となり、日曜日毎に敎會へ行つて懺悔

をして、その印の御符を貰つて歸れば宜い、その御符が天國へ行く手形だといふやうに心得る者ばかりになつた。それが一層進んで、免罪符を金で買ひさへすれば、懺悔をしないでも懺悔をしたと同じ効能があるといふ迄になつた。宗教改革の火の手の上つたのも偶然ではない。

懺悔の眞の心

以上は基督教の例を取つたのであるが、佛教に於ても全く同じ弊に陷つて居たのである。常に懺悔せよといふは常に心を新にせよといふ義である日に進んで怠るな、佛の境界に到達するまでは自ら戒め自ら改むることを忘れるなといふ義である。

慚は鐵鉤の如く能く人の非法を制す。是故に比丘常に當に慚愧すべし、暫くも替る事を得るなかれ。若し慚愧を離るれば則ち諸の功德を失ふ。愧ある人は則ち善法あり。若し愧なき者は諸の禽獸と相異ること無きなり。——佛遺教經

と教へられ、なほ又

若し罪を覆ふ者は罪卽ち增長す。發露懺悔すれば罪卽ち消除す。—心地觀經

ともあり、その懺悔の心に就ては、

汝懺悔せば應に厭離の心を生ずべし。汝比丘至誠如法に懺悔せば我爲に之を受けん。——四分律

ともいつてある。懺悔すれば今迄の吾が行ひを厭離する心をもつのが當然で、此心が足らなければ懺悔といふものでは無いのである。已に今迄の行ひを厭離すれば、更に新なる行ひの途が開かれる、此處に懺悔の貴い點が存する。唯だ過失を再びしないのが貴いといふのではない。眞の懺悔は大なる力である。

此の精神が忘れられて、懺悔といふことが極めて消極的の意味に解せられたところから、いろ〳〵の不健全な思想が生み出されて來た。今までし

誤られた佛法

た事が惡かつたと氣がついたら、佛の前で懺悔するが宜い。佛は大慈悲の心を以て如何なる罪をもゆるして下さるであらうといふやうな、無意義に近いことが敎へられて、大乘佛法の精神は全く泯びんとした。德川時代に聰明なる諸侯で、佛法に强い壓迫を加へた人のあつたのも强ち無理とは思はれぬ。若し人々が自分の行爲に對して責任を負はず、謝罪さへすればそれで濟むといふことが一般に認めらるゝならば、世の中の風紀はどれ程頽廢するか知れぬ。多くの儒者や國學者が此點に對して攻擊を加へたのは尤もなことである。しかし此の如きは誤られたる佛法の禍である。大乘經典を通讀して見れば佛は罪人に罰を與ふるものではなく、罰は人々が自ら取るものであること極めて明々白々である。罰を與へぬものに赦しを求めても全く無意義ではないが。佛が『懺悔せば我爲に之を受けん』といふは、眞の懺悔により新なる生活に入れる人の貴きことを承認しやうとの義に外ならぬのである。自己の罪に對して何人の赦しを求むるとも、漫然と赦さるべきものではない。自ら新なる生活に入り、自ら善を爲して罪を償ふことによつてのみ赦さるべきである。佛の慈悲は斯る力を與ふる所にある。佛の慈悲は愚なる老母の愛と同一ではない。努めず勵まぬものに赦しを與ふるやうな慈悲は眞の慈悲ではない。

懺悔と勇猛心

又自己の罪を反省して悔むといふは美しい心であるけれども、唯だ悔むばかりでは何にもならぬ。悔むのは宜いが、いつ迄も悔む事に囚はれず、疾く新なる道に向つて邁進すべきである。進むことがなければ悔むことは殆んど無意味である。眞に悔む人は必ず新になることを知る人である。前に引いた經文に能く慚愧する人のことを說いて『良馬に策つが如し』といつてあるは大に味ふべきである。悔むことが鞭となつて、良き道に邁進すべく吾等の心を策つことが肝要である。吾が過を知ることによつて、少し

も勇氣を失ふべき理由はない。間違つたのも自分の心である、間違ひと知つたのも自分の心である。さすれば此の間違ひを改むる力も自分の心から生み出されぬことは無い筈である。

徒に悔むは愚である

一切業障海は皆妄想よりして生ず。若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。――觀普賢經

といふは懺悔の眞の意義を最も明かに説き示されたる語である。譬へば草木の葉に露霜が繁く置いた時に、之を掃ひ盡さうと思つて如何に箒などを揮つて見ても、到底掃ひ盡せるものではない。然るに空に日が出て、その暖い光りが草木の上を照す時には、凡ての露霜が一時に皆消えてしまふのである。吾等の過失とか罪とかいふものも之と同樣であつて、遽かに掃はうとしても掃ひ盡せるものではない。凡ての行ひは一つの心から生み出されるのであるから、心の修養が足らずして、事に當つて審かに思ひ深く慮る力が具らなければ、たとへ今までの過失を悔んで見ても、又後から新しい過失が限りも無く出て來るであらう。しかし吾等は少しも失望するには及ばぬ。空に日が出て露霜を盡く消してしまふやうに、心の中に智慧の光りが輝いて來れば、罪は自ら消えて行くのである。凡ての罪や過失は皆妄想よりして起る。妄想とは眼前の事のみを見て永遠の事に考へ及ばず、小い一身の利害得失にのみ囚はれて、周圍の一切の事情に心を向けることの出來ぬのをいふのである。その妄想を除くことによつて、罪の根元を斷つのが卽ち佛道の修行である。然らば如何にして妄想を除くべきかといふに、經文に敎へて『端坐して實相を思へ』とある。

聞思修の三慧

實相とは卽ち『諸法の實相』の義である。諸法とは一切の事物のことである。事物の皮相を見ず、事物の一時的なる變化をのみ見ず、深く且精しく見て其の眞實の相を知ることが肝要である。若し能く有らゆる事物の眞

實相を見る力が具はるやうになれば、妄想は隨て除かるべきである。是れが眞の懺悔であると敎へてある。之によつて見ても、懺悔といふことが決して消極的、退嬰的のものでないことは明であらう。但し知るとか學ぶとか、智慧を磨くとかいつても、科學的の研究をするのとはちがふ、實行といふことが最も大切とされて居るのである。されば未だ能く行はぬものは卽ち未だ能く知らぬものと考へられて居る。斯ういふ考へから聞思修の三慧といふことが說かれるのである。聞とは敎へを受けることである。(昔は敎へを受けるといへば主として耳に聞く事であるから聞と名けてあるが、今ならば書を讀むことをも無論含むのである。)思とは之に就て自ら思慮を重ね工夫を凝すことである。修とは之を實行することである。之を實行して見て未だ充分でないと知れば、又敎へを受け、又思索し工夫し、又實行するといふ風に、此の三つの事を幾度ともなく反覆するによつて眞の智慧が眼を開いて行くのである。

此の觀普賢經は懺悔に就て最も懇切に說かれたる經であるが、その末段に於て『刹利居士の懺悔法』といふものが五箇條に分つて擧げてある。刹利とは卽ち刹帝利で、印度に於ける上流の階級である。卽ち此の五箇條は出家の人でなく、俗人にして佛法を信ずるものが懺悔の實を擧げん爲に、其身に實行すべき最も大切なる事項を示したものである。其の第一條には、

刹利居士懺悔法

當に甚深の經法、第一義空を憶念すべし。

第一義空

とある。空とは卽ち平等無差別の義であつて、決して空無といふやうなことではない。第一義空といふは、吾等の眼前の事物がいかに變化と差別とに充されてゐても、其等の變化を一貫して不變化なる原理がある。又其等の差別の中に通ずる無差別平等の本性がある。此事を常に念頭に置かなければならぬのである。吾等はいつも差別相にのみ囚はるゝ所から多くの罪

を作るのである。自他を別ち親疎を別ち、利害得失を別ち愛情好惡を別つて、眼前の利を求め一時の悅びを貪らんが爲に心を勞し身を勞する。此の根本の過を除かんためには第一義空を常に憶念して忘れぬことが肝要である。咲いた花は直ちに散り、盈ちた月はやがて缺けて行く。此等の有樣を見れば、世の中は變化極まりなきことを思はぬわけにはゆかぬ。しかし花は春毎に必ず咲いて必ず散るのである。盈ちた月は必ず缺け、缺けた月は又必ず盈つるのである。これ變化の中を一貫する所の不變化の相である。又吾も彼も共に人である。智者も愚者も優勝者も劣敗者も共に同じ天の下に活き同じ地の上に住む所の人である。これ差別の中を通じて看取せらるべき平等の相である。平生能く此事を念はなければならぬのである。次に第二條には、

父母に孝養し師長を恭敬す。

とある。これは至て平凡な事を擧げたやうに見えるかも知れぬが、要するに報恩の思想である。第一條に平等觀を擧げたのであるが、平等觀にのみ偏する時は矢張り中正の道を失ふに至るので、此の第二條を心に止めて居ることがまた極めて肝要なのである。何人も己の力のみを以て生存することは出來ず、周圍の多くの者の力によつて生存を續けて行くのである。但し自己の力もまた他の人の爲になつて居るのであるから、いはゞ相持ちとも稱すべきであるが、兎角に自己の施した所のみを覺えて居て、他人より受けた所は忘れがちである。佛法に於て四恩を擧ぐる中に於て、最も直接なのは父母と師長の恩である。吾が生存するは父母あるが爲である。吾が生存の貴きを知るは師長の敎へあるが爲である。此の大恩は平生に於て特に意に留めて居なければならぬのである。續いて第三條には、

正法をもて國を治め人民を邪枉せず。

正法治國

とある。これは上にいふ通り刹帝利といふが上流の階級で、此中から國王大臣等も出たものであるから『正法をもて國を治め』云々といつてあるのであるが、必ずしも國に限らず、一の團體のこととして解して宜いのである。昔の印度は多くの小國に分れて居て、國王といつても大地主ぐらゐの者であつた。而して一般に敎育の程度が低かつたのであるから、國王大臣等は政治上の實權を握つて居たのみならず、一般人民を指導し啓發すべき責任をもつて居たのである。今日に於ては社會各方面の人が協力して社會を健全に發達せしむるやうに努むべきであつて、昔の國王大臣の責任を社會各方面の有力者が分擔すべきものである。されば此の一條を『社會に正義が行はるゝやうに各自に努力すること』と解して、初めて今日に適切なるべきである。續いて第四條には、

諸の境內に敕して、力の及ぶ所の處に不殺を行せしむ。

令行不殺

とある。不殺を行せしむるとは卽ち殺生を禁ずることである。殺生を絕對に止めるといふことは今の時代に於て到底不可能の事であるけれども、殺生を禁ずる所の精神をよく味ふべきである。梵網經の中に『快意殺生戒』を說かれてある中に、

菩薩は應に常住の慈悲心孝順心を起し、方便して救護すべし。而るに反て更に自ら恣心快意をもて殺生するは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

とある。此處には大乘佛敎の修行をする者を皆菩薩といつてある。又波羅夷罪といふは卽ち大罪の義である。大乘の修行をするものは常に慈悲心を以て凡ての者に接し、凡ての者を救護せんことを志とすべきである。然るに殺生を喜ぶといふは此の根本精神に背反する行爲であるが故に大罪だといふのである。此文の意に照して見ると、不殺を行せしむるの意は極めて明白である。卽ち自己の勢力の及ぶ限りに於て、凡ての者に慈悲心に背反

せる行爲を愼ましむるために努力することである。社會を指導すべき地位に在る者の特に意を致すべき點である。さて最後の一條には、

知佛不滅

當に深く因果を信じ一實の道を信じて、佛は滅したまはずと知るべし。

とある。これは最も根本的のことである。深く因果を信ずるとなれば、努力の結果自己も終に佛と同しき大智を成就し得べきことを知り、前途に最も大なる希望をもつことが出來るであらう。又人として履むべき眞實の道は唯一にして二なきことを信ずるならば、如何なる境界に在つても惑はず懼れざるを得るであらう。又佛の滅したまはぬことを知るならば、常に佛の御力に護られて居ることの悅びを感じ、自ら凡ての罪に遠ざかり得るであらう。以上の五條を以て心とすることが卽ち眞の懺悔であるといふならば、眞の懺悔は最も大なる力を生み出し、最も光輝ある生涯を作るべきものなること更に疑ふべきでない。大莊嚴懺悔の名あるも誠に謂あることである。

懺悔に凡ての罪が消えるといふ意義は斯くして初めて徹底的に明になるわけである。懺悔の貴いことを眞によく辨ふる人が多くなつてこそ、社會に正義が完全に行はれ得べきである。不正を行つた人に社會制裁が遺憾なく行はれたとて、それで完全とはいはれぬ。何となれば其の不正の行爲に就ては、その當人のみが責を負うて濟むべきものでは無いからである。不正の行爲に制裁を加ふることを怠らぬと共に、斯る制裁を加へなければならぬ迄に立到つたことを、凡ての人が共に慚愧しなければならぬ。さうして互ひに相戒め相勵むことによつて更生の力が生み出さるべきである。例へば明治維新の大業に努力した人々でも唯だ武門が政治を擅にしたのは惡いことであるから、政權を取上げてしまはうといふことを考へたのみではない。斯ういふ狀態で久しくあつたのは、皇室に對してまことに相濟まぬ

事であつたと、國民が共に自ら責を負うて新しい時代の建設に努力しなければならぬといふ極めて嚴肅なる氣分があつたればこそあの大業も成就したのである。慶應三年六月、薩土兩藩の間に取交したる盟約書の劈頭に、『約定の大綱』といふのが掲げてあるが、その第一項に

國體を協正し萬世萬國に亘りて不レ耻、是第一義。

とあり、次に約定書に於て其の理由を説明して、封建制度の吾が國體に合はざることを述べて後に、

然則制度一新、政權朝に歸し諸侯會議、人民共和、然後庶幾は以て萬國に臨で不レ耻。是を以て初て我皇國の國體特立する者と云ふべし。……此大條理を以て此大基本を立つ、今日堂々諸侯の責のみ。成否顧る所にあらず、斃て後已ん。

とある。此大事を成すことを諸侯自らの責と爲し、斃れて後已まんといふ悲壯なる決心は『今迄はすまぬ事をして居た』といふ反省慚愧の念よりして出る筈である。反省なく慚愧なき者の前には唯だ墮落と滅亡とのあるのみである。吾等は常に思ひを此に致さなければならぬ。

一身の兩面觀

第十五章　良心の命ずる所

吾等は限りある生命をもち、限りある心の力と身の力とをもつて、限りなき天地の間に立つて居る。靜かに考へて見れば、吾等自身のいかにも微小なのを自ら憫まざるを得ぬやうにも感ぜられる。彼の蘇東坡が『赤壁賦』に於て、曹操が荆州を破り江陵を下つて來た昔の壯圖をおもひ、

固に一世の雄なり而も今安くに在るや。

と歎じ、轉じて自身の上に及び、

蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟。吾が生の須臾なるを哀み、長江

の窮まり無きを羨む。

といつたのも尤もに思はれる。しかし是は一面の觀察である。されば又一轉して、

其の變ずる者よりして之れを觀れば、天地も曾て以て一瞬なること能はず。其の變せざる者よりして之を觀れば、物と我と皆盡ること無し。而して又何をか羨まんや。

と自ら解いて居る。此の兩面の觀察が共に大切である。吾が身の微小なること、人生の功業の賴むに足らぬことをもよく考へなければならぬ。又吾が身の決して微小ならざること、人生の努力の無意義ならざることをもよく知らなければならぬ。

人生の眞の姿をシツカリと見なければならぬ。宜い加減にして濟まして置くといふは、自ら欺き他を欺くものである。徒に悲觀したり又樂觀したりするのは愚である。思ふに任せぬ事の多い世の中には相違ないのであるから、何事も樂觀して過すといふわけには行かぬのが當然である。然るに世間には往々にして自ら樂天家と稱するものがある。その主張する所は、思ふに任せぬ世の中に立つて、歎いても悔んでも何の役にも立つものではない。其等の事は一切思ひ捨て每日を愉快に過すことを努めるのが最も賢い道であるといふのである。此の如きは樂天でも何でもない。まことに寂しいあきらめである。古詩に

生年不レ滿レ百、常懷二千歲憂一。晝短苦二夜長一。何不二秉レ燭遊一。爲レ樂當レ及レ時。何能待二來茲一。

とあるやうに、來年のことは分らぬから、樂みの出來る時に樂みを盡して置かうといふ思想である。これではたとへ笑つて居ても、その笑ひの底に涙が潛んで居るのである。

寂しい樂天家

眞の樂天思想は厭世思想の中を通り拔けて後に初めて成立つものと思はれる。蘇東坡の所謂『その變ずる者よりして之を觀れば、天地も曾て以て一瞬なること能はず』といふ所に先づ眼を着けなければならぬ。變るといへば凡ての物が皆變るのである。希臘の哲人ヘラクライトスは人が川の中へ入つて身を洗ひ、出て來る時にはモウ元の川ではないといつて居るが、實際其の通りである。刻々に水は流れて行く、川に入つた時の水と出て來る時の水とはちがふのである。此の如く萬物の變化流轉する中に生を享けて居る吾等とて、いつ迄生きて居るものではない。或る連歌の會で

人を送りてかへる夕ぐれ

といふ句に、木山紹宅が附けて、

身をいつの煙のために殘すらむ

と詠じたといふが、誰にも斯ういふ感慨はあるであらう。人の葬りを送つて歸つた自分もやがては茶毗の煙となるのである。斯く果敢ない生を享けて居る間に、各自の性質氣風がちがひ、各自の境遇事情がちがつて、疑ひあひ爭ひあひ嫉みあひ惡みあふところから、世間は愈々面倒になつて行くのである。

貧しさに惱む人は此の貧しい中を通り拔けたら定めて樂になるであらうと思つて居る。ところが金を持つて見ると、其の金がまた煩ひの種となることが多い。賤しい人は貴くなれば苦があるまいと思ふが、貴くして愈々危害の身に迫るを感じ、その地位を棄て後に初めて心が伸々としたと喜ぶ人も少くない。香川景樹の歌に、

いづくかは思ひの家にあらざらむよそ目樂しき世にこそありけれ

とあるが、實際いかなる境界でも外から見るやうに樂なものではない。されば佛敎に於ては四苦八苦といふ事が敎へてある。生老病死を四苦といひ、

更に此の四苦に愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦を加へて八苦といふのである。生老病死の相續く間に少しも安きところの無いのはいふ迄もないが、愛別離苦といふものも凡ての人に共通である。花が美しいと思へば直ぐに散る、人の姿の美しいのも久しからずして老いる。親しい交りをして居る人にも事情によつては分れなければならぬ。皆これ愛別離苦である。又怨憎會苦といふのは自分の好まぬ事に出逢はなければならぬのをいふのである。如何なる人と雖も好まぬ事に全く出逢はずには濟まされぬ。ルキ十四世王は蛙の聲の喧しいのを嫌つて、農民をしてその邊の小徑を歩いて蛙の聲を止めさせたといふことが傳はつて居る。しかし如何にルキ十四世でも、雨や風までを止めることは出來なかつたであらう。次に求不得苦といふのは求めた通りの事が得られぬことである。いかに大なる富の力や權勢の力を以ても得られぬものが世間には多くある。藤原道長は權勢並び無く、

此世をば我世とぞ思ふ望月の缺けたることも無しと思へば

と詠じたが六十二歳で病に罹つた時、さまゞにして快癒を祈つたが終に癒ゑずして死んだ。彼も此世に思ふに任せぬものゝ有ることを此時思ひ知つたであらう。終りに五陰盛苦といふのがある。五陰とは身心の凡ての作用のことである。身心の盛なるが爲に種々の欲望を起し、その欲望が自分を苦しめる種となるのである。此等の四苦八苦は王公貴人より乞食に至るまで、苟くも人たる者には免れ得ぬものである。

如何に世の中を樂觀しやうと努めても、斯く思ふに任せぬ事の多いのを認めぬわけには行かぬのである。それに眼を閉ぢて、成るべく氣樂に世の中を送らうとしても出來ることではない。殊に世は次第に複雜になり、次第に多事多端となつて吾等のウツカリして居ることを許さぬのである。吾

等は宜しく大膽に此の苦みの多い世の中に直面して立ち、果して苦しいだけの世の中であるか、果して人の一生は無意なものであるかをシツカリと見究むべきである。斯くして厭世思想の中を通り拔けて樂天思想に到達し得らるゝならば、是こそ眞の樂天である。佛敎の如きは厭世的の說に充されて居るやうに見えるけれども、決してさうでは無いのである。厭世的の思想が佛敎の全部ではなく、その厭世的思想の中を通り拔けて眞の樂天的の人とならせやうといふのがその目的となつて居るのである。涅槃經の中に有名なる雪山童子の物語りがある。是こそ大乘佛敎の精神をよく現はしたものといふべきである。

昔大雪山の中に庵を讀んで獨り住み、坐禪して思ひを凝し道を求めて居た人があつた。世の人之を呼んで雪山童子といつた。時に帝釋天は彼の道念のいかに堅固なるかを試みやうと思ひ、身を變じて鬼神の形となつて彼の側に至り、古の佛の說きたまへる偈の半を唱へた。その半偈は

諸行無常
是生滅法

諸行無常。是生滅法。

といふのである。雪山童子は此語を聞いて大に驚き且喜び、誰が說いたのであらうかと、振返つて見ると鬼神の姿を見るのみである。之に近づいて『今の半偈は御身が說いたのか』と問ふと。『然り』と答へた。『これは誠に意味深長なる貴い語であるが、なほ殘りの半偈がある筈と思ふ。その殘りを聞かせて貰ひたい』と乞ひ求めたが、鬼神は之を斷つて『我は飢ゑて居るから、もはや說くことは出來ぬ』といつた。鬼神は生きたる人の肉を食物とするのであるから、他の物を以てその飢を充すことは出來ぬ。そこで童子は決心した、然らば自分が彼の食物とならう。今の偈の全體を聞いて之を世間の多くの人に傳へ、多くの人に悟りを開かせることが出來れば、自分の生命の如きは少しも惜むに足らぬ。自分の身を捨て殘りの半偈を聞

かうと思ひ定めた。『我が身を以て御身の食としやう、何卒殘りの半偈を說きたまへ』と彼が熱心に乞ふのに動されて、鬼神はやがて殘りの半偈を唱へた。

生滅々已。寂滅爲樂。

生滅々已
寂滅爲樂

童子は之を聞き終つて、そのあたりの崖にも石にも樹にも路上にも、出來るだけ多くの處に書き、而して後に自ら大樹に上り、彼の鬼神の食となるべく身を地に投じた。時に鬼神は帝釋の姿にかへり、童子を抱き止めて其の功德を讃歎したといふのが大體の話說である。

此の四句の偈は至て簡單なものであるけれども、よく佛敎の精神を言ひ現はしたものと思はれる。先づ第一の句に『諸行は無常なり』とあるが、此の『行』といふのは吾等の眼前に忽にして現はれ忽にして消え去る所の一切の物のことで、今日の語でいへば卽ち『現象』である。凡ての現象は變化流轉してやまぬのである、まことに無常である。第二の句には『是れ生滅の法なればなり』とある。此處にいふ『法』とは凡てのものをいふのである。生滅の法とは卽ち或は生じ或は滅して片時も止まらぬものといふ義である。吾等の眼に無常なりと映ずるも當然である。元來生滅流轉は萬物の通則である。その變化してやまぬものが無常と思はれ、果敢なく思はれるのは當然である。而して第三の句は最も肝要なので『生滅々し已れば』とある。『生滅といふことが無くなつてしまへば』といふ義である。生滅が無くなつてしまふのであるから、卽ち不生不滅である。吾等が眼前の現象にのみ心を制せられて居る間は、唯だ無常なるものばかりを相手にして活きて居るのであつて、まことに果敢ない生涯といはざるを得ぬのである。斯る果敢ない生活に於て泣くも笑ふも、得意も失意も皆殆んど無意義である。しかし斯く流轉變化してやまねものばかりが宇宙萬有の全體ではな

四句の眞意義

い。その變化の中を貫いて不變化なるものが存し、其の生滅の裏に不生不滅なる理が宿つて居る。此處をシッカリと捉へることが出來れば、其の人の生涯は初めて有意義のものになり得べきである。斯くて第四の句の『寂滅を樂と爲す』といふ境界が實現する。寂滅といふは涅槃といふも同じことである。寂滅といへばとて、凡ての物が空に歸したといふのではない。寂とは卽ち不變化といふ義である。滅とは差別を滅するの義である。されば寂滅とは絶對の眞理を捉へ得たる境界で、これをこそ眞の樂といふべきである。

此世は確かに穢土である。毎日吾等の出逢ふ事に一として吾等を滿足せしむるものはない。しかし吾等が此穢土を穢土のまゝにして置くは、あまりに生きがひの無いことである。又此世界は娑婆世界と呼ばれて居る。娑婆とは『堪忍』といふことである。互ひに心に充たぬことばかりで、堪忍

穢土と淨土

しなければ過されぬ世である故に、名けて娑婆といふのである。それで佛敎といふものは、此の娑婆の生活を無意義のものとして、來世に至り極樂淨土に生れるやうに信心を勸めるものと一般には考へられて居るやうである。ところが法華經を讀んで見ると、十方の世界の衆生が此の娑婆世界に向つて拜んだといふことが書いてある。

合掌して娑婆世界に向ひ是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。……時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。——神力品

十方の世界の者が此の娑婆世界を拜んだといひ、十方の世界と此世界とが通じて一つのものになつたといふは、卽ち此の娑婆世界がもはや娑婆世界では無くなつたことを示すものである。なほ又

我が此土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり。寶樹花果多くして衆生の遊樂する所なり。——壽量品

心の淨穢による

ともある。『我が此土』といふは卽ち此の娑婆世界のことである。これが佛教の理想である。娑婆世界がいつ迄も穢土ではなくて、全く淨土になるといふことが理想である。

畢竟淨土といひ穢土といひ、住む人の心によつて定まるものであるから、穢土を淨土ならしむべく努力しやうといふ決心さへつけば、徒に穢土の住み惡いのを歎ずるには及ばぬのである。維摩經に菩薩の道を說いて、

其心淨きが故に一切の功德淨し。一切の功德淨きが故に住める土もまた淨し。是故に淨土を得んと欲せば當に其心を淨くすべし。其心淨きに隨ひて則ち佛土もまた淨し。

とあるは最も明かに穢土と淨土との分るゝ所以を示したものである。無量壽經には阿彌陀佛の住みたまふ無量壽國の貴い有樣が委しく說かれてあるが、而も其中に、

囚はれぬ心を如何にして作るか

心を正し意を正して齋戒淸淨なること一日一夜なれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歲なるに勝れたり。

といつてある。卽ち此の穢土に在つて心を正し行を淨くし、周圍を淨化して行くために努むることの功德が最も大なることを敎へてあるのである。

然らば淨いといひ穢れたりといふことは何を本として區別するのであるか。小なる自己に囚はれて恣に自他彼此を分つのと、その囚はるゝ所を去るとのちがひである。眼前の事に拘はつて淺はかなる利害得失の打算に沒頭するのと、その拘はる所を脫し得たるとの差である。然らば囚はれず拘はらぬ心を如何にして作るかといふに、それは唯だ囚はれまい、拘はるまいと考へて居るばかりでは、何時までたつても其功を見られぬのである。之に就ては釋尊の成道前後の事實を回顧して見ることが最も有益であると思ふ。釋尊は人生の眞の意義を知らんがために出家したのである。出家前

悉達太子と苦行婆羅門

には淨飯王の太子で其名を悉達多といつた。太子は少年の時から人生の眞の意義に就て疑問を懷き、多くの學者に問ひ質して見ても、誰の答へも其の心を滿足せしむるに足るものは無かつた。終に太子といふ地位を棄て、天下の有らゆる學者を尋ねて其敎へを聽き、久しく懷いて解けなかつた疑ひを解かうと決心したのである。其の頃の學者といへば皆婆羅門敎徒である。その敎徒の中で特に學德共に秀でた人は人里離れたる山中に住んで淸淨なる生活を爲し、又その德を慕うて弟子となる者も多くあつた。斯る人々は一般に仙人と呼ばれて居た。太子は先づ其等の仙人の一なる跋伽仙の門を叩いた。此仙人は多くの弟子を集めて苦行を敎へて居た。或は食を斷ち或は荊棘の中に起臥し、或は火に入り水に投じて、さまゞの苦行をするのである。太子は何故に苦行をするのかと尋ねた。彼は之に答へて『此世に於て苦行を積めば、その報として來世は天上に生じ、大なる樂を享くるのである』といつた。太子は之を聞いて『それは究竟の樂でない。苦行をした報で樂を得るといふなら、その報には限りがあるから、終には樂を失ひ苦を受くるに至るであらう』と、直ちに此處を去つた。

太子と阿羅邏仙

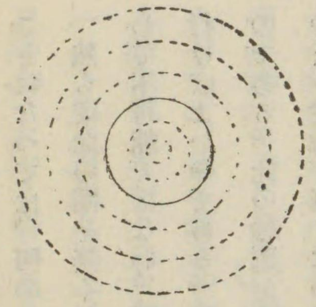
太子はそれより三仙人の門を叩いて說を聽いて後に、當時德行最も高き仙人として聞えたる阿羅邏の所へ行つて敎へを求めた。仙人は之に對して『人には我慢がある。我慢より痴心を生じ、痴心より染愛を生じ、それより貪瞋煩惱を生じて限りなき苦の種を作るのである。故に根本の我慢を除く事を努めなければならぬ。それには坐禪をして心を練り、一切の相を離るゝ修行をしなければならぬのである』と說いた。太子は之を聞いて『その修業の結果はどうなるのか。知が無くなるのか、知があるのか。知が無くなれば木石と同じものになるのである。知があるならば又緣に惹かれて樣々の迷ひを作るであらう。何れにしても吾が求むる所では無いやうであ

る』と追窮したが、仙人は答へを與へ得なかつた。太子は卽ち此處を去り又一人の欝陀羅摩といふ仙人を尋ねたが、此人のいふ所も前の阿羅邏以上に出る事が無かつたので、終に自分獨り修行して獨り證得するの外なしと決心し、此より六年の修行を重ねて三十五歳の時に成道を得たのである。

其の覺り得た所が卽ち五十年間の說法となつたのであるから、之を一言で說き明すことは極めて困難であるが、

今此三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり。——法華經譬諭品

といふことを此時明かに自覺せられたものと思はれるのである。人々が小き自己に囚はれて、互ひに罪を作り過を重ねて居るのが、卽ち人生に苦惱の多い元であることは明であるが、如何にして之を改むべきであるか。克己の習慣を作ることも其の良い方法の一つと考へられる。若し自己の有する多くの欲望を制することが出來れば、自己を固執して他と爭ふといふ念は次第に淡くなつて來るにちがひない。衣食住に對する欲望が薄くなり、權勢や名譽を貪らうといふ念が少くなれば、互ひに我を張つて爭ひあひ鬪ぎあふといふ淺ましい事はなくなる筈である。次の圖のやうに自己といふ圈をかいて此の輪廓を固執しやうとするのが普通の人情であるが、その圈を無くなすために克己的の修行をするのは、その中へ點線でかいた圈のやうに段々と少くして行つて、つまり何も無しにしてまはうといふやり方である。しかし何も望まぬ、何も求めぬといへば結極何も考へぬといふことになる。何も考へぬといふ事になれば、釋尊が前に阿羅邏仙人に向つて提出した問題のやうに、人にして木石と擇む所なきに至るのである。卽ち人生なるものを否定する



無我といふこと

ことに歸着するのである。人生の眞の意義を求めた結果が人生を否定することになつては、何のかひも無い次第である。

然らば此の圈を無くなすことはどうしても出來ぬかといふに、それは決して不可能ではない。卽ち圈の外へ點線でかいたやうに段々と大きくして行けばよいのである。自己といふ圈の中へ自己以外のものを包容して行くのである。此の輪廓が次第に大きくなつて無限の大きさになつてしまへばつまり輪廓が無くなつたのである。釋尊が三界を皆吾が有なりとし、其中の衆生を悉く吾が子なりとし、一切衆生のために力を盡すことは吾が一身の爲に力を盡すが如くであるといふ境地に到達したのは、卽ち自己といふ圈の輪廓を無限に大きくしたものである。さればまた

一切衆生が異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり。——涅槃經

ともいつてある。されば我を無くなすといふことは、結局小なる我をすて

無我は大我

〻大なる我を得ることである。自己存在の意味が斯く解せられて來れば、心に大なる悅びが湧いて來るわけである。自己の存在は五尺や六尺の軀に限られて居ない、五十年や百年の壽命に限られて居ない。一切衆生のための存在である、一切衆生の喜びは卽ち吾が喜びである、一切衆生の惱みは卽ち吾が惱みである。吾は空しく生るものにあらず、徒らに天地の間に此身を容れて居るものでないといふ自覺が出來た時に、自己の存在は極めて有意義のものになる。釋尊は此の如き自覺を得たのであるが、獨り釋尊のみならず、誰も皆此の如き自覺を得べき本性を有するのである。誰もその本性を有しながら之を知らずして小事にのみ營々として居るのであるが、一たび之を自覺した人は、獨り自己のみならず他の人もまた努力次第で自己の如くになり得べきことを知る故に無限の悅びが感ぜらるゝのである。

釋尊成道の時に

大地有情と同時に成道

我大地有情と同時に成道す。

と悟つたとある。有情とは卽ち人の事である。吾が成道は吾一人の成道でない、大地の上に住む凡ての人の成道であるといふ自覺を得たのである。

勿論克己的の修行も必要ではあるが、それが修行の全體ではない。それは小き自己を固執するの念を打破るための修行であるが、それと共に更に自己を大きくして行くところの修行をしなければならぬので、佛敎では之を菩薩道といふのである。菩薩道を修めて怠らなければ終には釋尊と同じ自覺が得られ、釋尊と同じやうな洪大なる德を成就することが出來るのである。菩薩道なるものは慈悲の心を以て一切衆生に接することを所詮とするのであるが、實はそれが自己の爲なのである。濡れたものを乾かさうといふには、火の上に置くに若くはない。乾いたものを漏らさうといふのには、水に漬すに若くはない。小い自己に囚はれ、眼前の得失に囚はれるた

菩薩道

めに多くの罪を作り多くの苦の種を作つて居るのを救はうとするには、それと正反對の習はしをつけるやうに努むるの外はない。それが卽ち菩薩道なのである。人の爲に力を盡す習はしをつければ、自己に囚はれるといふ小い念は無くなつて行く。さうして自己が救はれるのである。自己の胸中に安樂の天地が開かれるのである。

布施は是れ菩薩の淨土なり。——維摩經

といふ語がある。布施とは無量壽經に『恩を布き惠を施す』とあるのでよく其意が悉されて居る。なほ之を分けていへば財物を以て人に施すを財施といひ、人に敎へて惑を解くを法施といひ、人の爲に苦を除き難を救ふを無畏施といふのである。斯く人の爲に力を盡すことによつて、自己の心に善い習はしを作つて、小なる我を固執する念を絕滅し得るが故に、是こそ菩薩の身を安んずべき境地であるといふ意味で『菩薩の淨土』といのふで

ある。

佛教の中には無常觀が頻りに說かれてある。咲いた花は散り盈ちた月は缺け、盛なる者は衰へ榮ある者も傾く時があるといふことが徹底に說き示されてある。人生の實際の有樣を通觀すれば確かにその通りである。斯の如き教へによつて世間の名利や權勢に心を惹かれることが無くなり、如何なる境遇にあつても悶えず惱まず、悠々自適して居られるのを名けて『解脫』といふ。斯の如き教へを耳に聞いて悟り得たものを『聲聞』といひ、たゞ耳に聞いたのみならず、自ら日每に經驗する所の事に思ひ合せて世の無常を諦め得たものを『緣覺』といふのである。此等の人々は何れも解脫を得た者であるから釋尊も深く之を嘉せられたことであらうと思ふと、案外にも、

脫出し得た人

譬へば人有て深坑に墮墜すれば、是の人自ら利し他を利すること能はざるが如く、聲聞緣覺も亦た復た是の如し、解脫の坑に墮して自ら利し及び他を利すること能はず。――大集經

といふやうに、聲聞と緣覺とを排斥する語が見えるのである。此處に佛教の眞の精神が現はれて居る。

人は共に生くべきものである。人のみならず、此の宇宙間に孤獨に存在するものは一つも無い。吾等は凡ての人、凡ての物と共に生き共に存するのである。(前の『人とその環境』の章を參照)されば佛教に於ては四恩を說いてある。四恩とは一に父母の恩、二に衆生の恩、三に國王の恩、四に三寶の恩である。衆生とは一切の人のことである。一切の人は互ひに他の力を借り、又他の力となり互ひの生存を續けて居るのである。三寶とは佛法僧である、佛と佛の說かれたる法とその法を弘むる僧とによつて凡ての人が道を知るのである。以上の四恩を負うて居る吾等なるが故に、吾等は

四恩

自己の一身をたゞ自己のものと思つてはならぬのである。世の無常を觀じて周圍の者の爲に囚はれぬやうになつたのも亦た自己一人の力ではない、所謂四恩によるものである。然るに獨り自ら潔くして世を避け俗を離れ、多くの迷へる者惱める者を遙かに上の方から見下して居るといふのは、恩を受けて恩に報ずる事を知らぬものといはなければならぬ。これ卽ち佛によつて呵責せらるゝ所以である。世の無常を觀じて何物にも囚はれぬ樣になるといふのは、更に進んで善を爲すべきための道程にすぎぬのである。囚はれず求めぬ心を以て世に立ち人に接してこそ、眞に人をも世をも益することが出來る筈である。

坑の中へ墮ちた人は手も足も出ぬから、自分一人としても自由を失ひ、また他の人の爲にも何の役にも立たぬのである。若し利欲より外に何も思はぬといふ人は、これ利といふ坑に墮ちたのである。若し名譽より外に何

も思はぬといふ人は、これ名といふ坑に墮ちたのである。それと同樣に若し一身の解脫を求めて、此より外に何も思はぬ人は解脫といふ坑に墮ちたものであつて、切角道を學んだかひの無い者といふべきである。元來佛敎の詮とする所は凡ての人に涅槃を得せしめんとするに在る。涅槃とは煩惱を滅し盡したる境界である。煩惱とは要するに小なる自己に囚はれて、天地萬有の實相を見定むる力のなくなつたのをいふのである。然らば自己の解脫を求むるにのみ專にして、世の多くの人の苦み惱めるを救はうとする念のないのは、なほ煩惱の繫縛を離れきらぬものといはなければなるまい。釋尊は自ら六年の苦行を重ねた末に大覺を得ると共に、一切の人を敎へ導いて同じ大覺を得せしめんことを念とし、

我もと誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。——法華經方便品

と明言したのである。しかし釋尊の敎へを受くるものが、釋尊の心を以て自らの心とすることに努めず、たゞ一身の解脫をのみ求めて居るならば、此の大理想はいつ迄も實現せられずして終るべきである。されば文殊師利菩薩は、

枯樹更に花を生ずるやいなや、山水本處に還るやいなや、折石また合ふやいなや、焦種芽を生ずるやいなや。――方等陀羅尼經

とて、聲聞や緣覺が決して佛の境界に到達することの出來ぬのも亦た此の如くであると斷定したのである。

佛の心を以て吾が心として日々の行を勵むものが卽ち菩薩である。菩薩の共に住み共に生き、共に相勵まし共に相扶け、共に道を行ずる處はやがて淨土と成るべきである。維摩經の中に淨土に生るべき八つの條件を擧げてある。第一には『衆生に益を與へてその報を望まず、衆生に代りてその

淨土に生るべき八條件

苦を受くること。』第二には『心を衆生と等しくし常に自ら謙下すること。』第三には『諸の菩薩を宛も佛を敬ふが如くに敬ふこと。』第四には『未だ聞かざる所の經文を聞いて疑はぬこと。』第五には『己より德の下れるものと相違背せぬこと。』第六には『人の福を羨まず、己の福を誇示せぬこと。』第七には『常に己が過を省みて他の短を責めぬこと。』第八には『常に一心を以て諸の功德を求むること』である。此の如き心をもつて居る人が多くなれば穢土卽ち淨土となるべきである。此心をもつて世に立つものは、離合變化の極まりなき中に在つて少しも其の離合變化に煩はされず、永く世を照すべき光りとなるべき者である。

斯る貴い心は何人にも具はつて居る。敎へに依らなければ發揮せられぬけれども、敎へによつて作り出されたのではない。敎への力につて、吾等の本來具有して居る貴い心が育てられ伸されるのである。此の貴い心

誰にも佛性がある

を『佛性』といふ。卽ち佛と成るべき種である。前に引いた不輕菩薩が行き逢ふ人を皆禮拜したといふのも、要するにその具有せる佛性を敬んで拜んだのである。

一切衆生は定めて當に大信心を得べし。是故に說きて一切衆生悉く佛性有りといふなり。——涅槃經

とある。一切衆生といへば賢愚老幼尊卑を問はず凡ての人を其中に含むのである。

心則ち濁亂を離るれば我心を說きて佛と爲すべし。——入楞伽經

ともいつてある。其の濁亂を離るゝといふは卽ち心に具はつたる本來の性に返つたことである。

長者と窮子

法華經の信解品に有名なる長者と窮子の話がある。或る長者の子が幼年にして父の家を迷ひ出て、久しく諸國を流浪する間に次第に困窮し、纔かに賤しい勞役をして生命を支へて居た。父の長者は其子の身の上を案じ、いかにもして彼を尋ね出さうと思つて諸國を旅行したが、容易に見つけ出すことが出來ぬので、暫く或國の都に滯在し、其國の王をはじめ上流の人々と交際して豪華の生活を營んで居た。ところが子の方は各所を漂泊して偶然にも此國へ來て、吾が父の家とは知らずにその門に立つた。門口から家の中を覗いて見て其の生活の立派なのに驚き、いつ迄も斯んな所に立つて居て、もし咎められてはならぬと思ひ、急いで其處を立去らうとした。しかし父は一目見て直ちに久しく尋ねて居た吾が子であると知り、人をして彼を誘ひ入れしめた。子は久しい困窮の爲に心が甚しくひがんで居るので、これは僞つて誘ひ入れて何かの危害を加へるのであらうと誤解し、あまりの恐ろしさに氣絕してしまつた。父は之を見て『是は急いでもいかぬ』と觀念し、彼を介抱して放ち歸らしめ、別に人を遣つて彼を掃除人と

して雇ひ入れた。それで最初は賤しい勞役に服せしめ、次第に家の中の樣子が分るに隨つて奥向きの用をいひつけ、彼の心が安らかになつて來たのを見て、親戚故舊を呼び集め『是は吾が實子である』と名乘りをして家財を盡く讓り與へたといふのである。父とは卽ち佛である、子とは卽ち吾等衆生である。吾等は佛と同しき本性をもつて居ながら、久しく迷ひの生活を送つて居たのである。佛は之を憫んで種々の方便を以て吾等を敎へ導き終に佛と同しき悟りを得せしめらるゝのである。されば悟るといふは要するに吾が本來具有する所の性質を回復したに外ならぬのである。

されば善を爲せといひ道を行へといひ、慈悲の心を以て人に接せよといふも、究竟する所は汝の心の示す所に從つて行へといふことになるのである。其の貴い心を磨き上げる爲に種々なる敎への要があるのである。これは佛敎のみならず、儒敎に於ても歸する所は此處に在る。前に引いた中庸

の語に『天の命之を性といひ、性に率ふ之を道といひ、道を修むる之を敎といふ』とあるも、要するに聖人の敎は人の本性に基いて立てたものであるとの意である。又『誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり』とあるを鄭玄が說明して、『誠は天性なり、之を誠にするとは學んで之を誠にするなり』といつたのは要を得て居る。卽ち學んで其の天性を遺憾なく發揮し得るに至るのである。孔子の言に『仁遠からんや我仁を欲して斯に仁至る』とあるのも、畢竟仁を爲すことが人の天性に基くものなることを明にしたのである。又同じく孔子の語に『性相近し、習相遠し』とある。人々の日に爲す所行ふ所がそれ〴〵に異るために、互ひに相遠ざかつて行くけれども、性はもと相近きものである。易は天道を人道の基づく所として解するものであるが、易の繫辭傳には

一陰一陽之を道と謂ふ。之を繼ぐ者は善なり。之を成す者は性なり。

とある。伊藤東涯は之を解して『善とは人の道にして仁智の統名なり。人道の善を以て天道の善を繼ぐは、猶ほ子が父の事を繼ぐが如きなり』といひ、また『人の斯道に由つて行ふは其性の善なればなり。若し人の性をして物の無智なるが如くならしめば、豈に能く道を行ひて之を成すことを得んや』といつて居る。

耶蘇は人々が皆その罪を悔い、共に神に歸すべきことを敎へて居るのであるが、その罪を悔ゆるといふ心が起るのは人々に具はれる聖靈の力によるものと見なければならぬのである。されば嚴しく戒めて、

人々の凡て犯す所の罪と神を瀆すことは赦されん。されど人々の聖靈を瀆すことは赦さるべからず。言を以て人の子に背く者は赦さるべし。されど言を以て聖靈に背く者は、今世に於てもまた來世に於ても赦さるべからず。

といつて居るのである。人々の私意私情による判斷はそれ〴〵に異るけれども、神によつて同じく賦與せられたる聖靈の判斷は自ら一致すべきものである。それ故にまた、

聖靈は衆理を爾等に敎へ、また我が凡て爾等にいひしことを爾等に憶起さしむべし。

ともいつたのである。

何れの敎へに於ても吾等に或る貴い心の具はれることを敎へぬものはない。或は佛性といひ或は道心といひ、或は聖靈といふが、要するに此の變化流轉の極まりなき現象界に在つて、何等かの常住不變なるものを捉へ得る力が吾等に本來具はつて居ることを示すものである。多くの倫理學者が良心といふも此事である。反省し慚愧するといふも畢竟私情を去り私心を斥けて、此の良心の聲に聽くことに外ならぬのである。但し良心なるもの

は萬古に亙つて一定不變なものであるか、發達し又は變化するといふことは無いか。これ更に進んで究めなければならぬ所の大切なる問題である。

第十六章　二つの心

人は神に近づき得るものであるとも考へられる。又人は罪の子であるとも考へられる。智度論には『大火の人を燒くも是れ猶ほ近づく可し、清風の形無きも是れ亦た捉ふ可し、蚖蛇の毒を含むも猶ほ亦た觸れつべし、女人の心は實を得可からず』とあるが、獨り女人の心ばかりではない、誰も其心の變轉して定まり難く捉へ難きことは同樣である。大日經の始めに於て、佛の智慧とは如何なるものであるかとの疑問を提起し、之に答へて云何か菩提とならば、謂く實の如くに自心を知る。といつてある。菩提とは卽ち眞の智慧のことである、心の實際の有樣を知

定まり難き心

るのが眞の智慧であるといふのである。而して後に吾々の胸の內に動く心を數へて、貪心無貪心等の五十九心が擧げてある。まことに吾等の胸の中には種々雜多の心が藏せられて、而も刹那毎にその樣々なる心が代り代りに現はれて來るのであるから、之を實の如くに知るのは至難の事であるに相違ない。

殊に吾等の身を寓する所は極めて複雜にして變化多き社會である。その多くの事に惹かれて心の移つて行くさまは、

心は境界に隨ひて流る、鐵の磁石に於けるが如し。——楞迦經

といはれた通りである。一日の中に於て幾たび心が變るか知れぬ、果してどの心を眞の吾が心と認むべきか、吾ながら殆んど見當がつかぬくらゐである。大集經に末世のさまを形容して『鬪諍堅固の世』といつてあるが如何にも適切である。人々皆我意に募つて相爭ふことのみを主にして居る。

忙しすぎる世の中

此のあわたゞしい中に身を置いて居ると、冷靜なる分別などは殆んど失はれ樣とする。朝夕の電車の乘り降りなどでも人々は皆血眼になつて居る。乘る者は降りる者の敏速でないのをまだるく思ひ『何をグズ〳〵して居るのか』といふやうな顏つきで睨みつけて居る。降りる者はまた乘る者の急ぐのを不愉快に思ひ『そんなに急がなくとも宜さそうなものだ』といふやうな樣子で睨みつけて居る。互ひに何の恩怨も無いのであるが、互ひの立場のちがふ所から暫くは敵同士のやうになつて居るのである。乘る人も今に自分が降りるのであるから、降りる人の心持を察してやればよい。又降りる人も今少し前に自分が乘つたのであるから、乘る人の心持を察してやればよいのだが、あまりの忙しさに互ひに其の餘裕を失つてしまつたのである。

斯ういふ有樣を見ると、いかにも人間といふものは賴もしくないもの、

賴とし人の心

我儘勝手なものと見えるのであるが、必ずしもさうでは無い。此の大なる混雜の最中に、稚い兒がチョコ〳〵と走つて來て電車の車輪に觸れやうとするのを見れば、乘る人も降りる人も同じ心で『ア、危い』といふのである。今までの敵同士は忽ちにして同じ心の人となり、共に稚い兒のために心配をしてやるのである。而もその稚い兒は全く見も知らぬ人の子であつて、互に何の關係もない者なのである。其處へ母親が駈けて來て無事にその兒を連れて退けば『マアよかつた』と皆が同じ心で安堵の胸を撫でる。その兒が車輪に觸れて死んでも自分達に何の損もない、又その兒が助かつたとて何の得もないのであるが、多くの人が同じ心で彼の爲に憂ひ、又彼の爲に喜んでやるのである。斯ういふ所を見ると、また誠に賴もしい心を多くの人がもつて居るとも思はれる。ところが斯く賴もしく見えた人が又他の停留場で電車を降りる時に大なる混雜にあふと、矢張り乘る人を睨み

つけて敵同士のやうな氣分になるのである。

此の簡單なる事實の上に、吾等の生活が矛盾に充ちたものであるといふことが能く現はれて居る。電車に乘る者と降りるものとが互ひに敵同士の如くに思ふといふは、畢竟自己本位の思想から來るのである。人は共に活きて居るものであるのに、その共にといふことを忘れて唯だ自己の立場をのみ固執するところから斯んな淺ましいことが起るのである。ところが見も知らぬ稚い兒のために或は心配してやり或は喜んでやるといふは自己本位の立場を全く捨てた心である。他人の憂ひを自己の憂ひとし、他人の喜びを自己の喜びとするのである。若し此の如き心を以て常に他人に對するならば『今此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり』といつた佛の心と同しきを得べきである。然るに此の如き心の發動はホンノ暫くの間であつて、又元の自己本位の思想に戻るのである。斯く二

心の矛盾

つの相反せる立場の中に挾まれて、或は右へ惹かれ或は左へ惹かれ、よろめきながら毎日を送るのが吾等の實狀なのである。此處に人生の惱みの根原がある。

惱みの種

人の心の限りなく變化するさまは彼の大日經に說かれた通りであるが、その樣々なる變化の元は二つの心であると見られやう。小い自己を固執する心と、小い自己を捨てゝ人と共に活きんとする心である。此の二つの間に惹かれてよろめいて居る間に種々無量の變化が起り、種々無量の苦みや惱みが起るわけである。若し小い自己を固執するといふことより外に何も考へず、大混雜の電車の中へ多くの人を突き退けて飛び込む時のやうな心で常に居られたなら、苦みも惱みも殆んどないであらう。ところが誰にもそれは出來ぬことなのである。徹頭徹尾自己本位でやつて見るうちに、多くの人に遠ざかつて行く寂しさが自然と感じられて來て、その突進する足

元は必ず鈍くなつて來るのである。然らば佛菩薩の如くに常に大慈悲を以て一切の人に接し、一切の人の苦樂を以て自己の苦樂とするといふ念を以て終始し得られるかといふに、これも普通の人には極めてむつかしいことであつて、動もすれば小い自己を中心にして物事を考へたいといふ念が交つて來るのである。斯く兩端に惹かれて、常にヨロ〳〵して居るので、苦しくもあり惱ましくもあるのである。自分が惱むばかりで無く、人にも惱みを與へるやうになるのである。

親子の情ほど美しく醇なるものはない。親が其子を大きくし、よく敎育し、幸福にしてやりたいと思つて心を碎いて居るさまは何よりも貴く思はれる。ところが多くの親の心には、自ら覺えざる間に自己の滿足を求めやうとする念が動いて來て、『子のためだ』と思ひながら實は自分のためにいろ〳〵な事をやつて居るのである。近年各種の學校に入學希望者が劇增して來た爲に、いつも入學期にはさま〳〵の悲慘な事實を見なければならぬやうになつた。或る學校の入學試驗を濟ませた十四歲の少女は、家へ歸るなり直ぐ發熱して倒れてしまつたが、『若し入れなかつたら堪忍して下さい』とその母親に一言いつたきり失神の狀態となり、一二日後にはとうとう死んでしまつたのである。此の一言はいかにも悲痛なものではないか。

痛ましい犧牲

親は其子の爲に善い學校を擇んで、是非とも入學させやうとして熱心になつて居るのであるが、その熱心の中には眞に吾が子の幸福を望むといふ念のみならず、自己の名譽心を滿足させやうといふ念が混じて居たことを否定は出來まい。それを直覺的に知つた少女は、若し入學が出來なかつたら堪忍してくれと賴んで、過度の勉强の犧牲となつて死んだのである。入學難が年々甚しくなるのは現今の敎育設備の不完全なのも其の重なる原因の一であるけれども、高等の敎育を志望する者の數が多すぎるのも事實であ

る。凡ての親が充分に反省して、眞に吾が子の幸福を謀る事と、眞に社會に貢献したいといふ事の外に、自己の滿足を求めやうとか、朋友知人の間に『よい子をもつた』といふことを誇りたいとかいふ念を制して行くやうに（全く無くすことは凡夫では出來まいが）努めるならば、餘程その困難を緩和することが出來るに違ひない。

これは一の事例にすぎぬが、人のためと思つてする事の中に、自己の爲といふ念がいつの間にか混入するので、自分も苦しみ人をも苦しめて居る場合の隨分多いのを、各自に反省すべきである。前に懺悔の貴いことを說いたが要するに二道に惑かれて居る心が其の一方に向ふやうになるので貴いのである。又無我とは我を大きくするのであるといふことも說いたが、歸着するところは矢張り二つの心が一つになつて行くことを意味するのである。古の武士が名を重んずるといふのは決して小い名譽心を滿足させることでは無く、一身の利害を離れて忠義を盡すのを心の悅びとするといふ意であつたに違ひない。しかし一歩を誤ると、小い名譽心を滿足させたいといふ念に累ひせらるゝを免れなかつたやうである。その名譽の爲に眼が昏んで大局を觀ることが出來なくなり、つまらぬ爭ひを惹き起した例は夥しくある。『武士の意地』といふことも往々にして小い名譽心を傷けられた爲の爭ひに陷り、幾多の悲慘な出來事を生んだ。

二つの心が一つになる

とればうしとらねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり

といふやうな歎聲を發する人のあつたのも無理ならぬことである。

北條時宗が軍國多事の中に於て一日も參禪を怠らず、また經卷を書寫する等いろ／＼修養の工夫を積んだのも、其意の在る所は察するに難くない。斯る大事に當つて最も戒むべきは功名心に誤られて大局を觀ることを忘れることである。一身一家の譽れと國家の利害休慼との間に本末輕重の

時宗と正成

關係を見誤らぬやうにしなければならぬのである。流石に時宗は此點に眼をつけ、自己の修養に全力を注いだものと思はれる。大休が彼に送つた詩に、

勿レ耽ニ於泉石一。勿レ厭ニ於塵裏一。縱使ニ八風吹一。心若ニ泰山一安。黃卷聊遮レ眼。白日常清閑。無ニ心與レ物競一。得喪不ニ相關一。云々

とあつたのは、時宗の大に吾意を得たりと感じた所であらう。彼は二つの途に惑かれ易い心を一つにすることが出來て、その大任を見事に果し國家を泰山の安きに置いたのである。又南朝の忠臣の中に於て楠木正成が殊に偉大に見えるのは、小い名譽心などを全くすてゝ居た爲と思はれる。新田義貞などになると『足利に笑はれるな』といふやうな名譽心が可なり強く働いて居るやうである。ところが正成の方は自分が敵に笑はるゝとか笑はれぬとかいふことよりも、皇室と國家の安危存亡といふことにのみ常に心を注いで居る。それであるから赤坂城を落ちて金剛山に立て籠る時でも『戰爭は今度に限らぬ、此處は一先づ落ちて再擧を謀るに如くはなし』といつて、速かに城をすてゝ去つたのである。逃げることが國のためであれば、少しも躊躇せずに逃げるのである。又湊河の戰の前にも後醍醐天皇の御諮詢に對して『陛下は叡山に行幸になり、私は本國へ歸り、足利勢を自由に京都に入り込ませて置いて然る後に策を立てませう』と申上げて居る。敵に笑はれぬやうにしたいといふ小い名譽心に囚はれず、飽くまでも大局に眼を注いで居るのが實に貴く思はれる。

斯る偉大なる人の事蹟を仰ぐにつけても、吾等の心がいつも二つの道に惑かれてよろめいて居ることを悔まざるを得ぬのである。しかし徒らに悔むも益の無いことである。此書の劈頭に引いた孔子の言の如く『學ぶに如かず』である。荀子の勸學篇に、

學ぶに如かず

積土山を成せば風雨興り、積水淵を成せば蛟龍生じ、積善德を成せば神明自得し聖心備はる。故に跬步を積まざれば以て千里に至る無く、小流を積まざれば以て江海を成す無し。騏驥も一躍して十步なること能はず、駑馬も十駕すれば功舍かざるに在り。

といひ、更に學を爲すの要を說いて、

君子の學は耳より入りて心に著き、四體に布き動靜に形はる。端にして言ひ蝡にして動く、一に以て法則と爲す可し。小人の學は耳より入りて口より出づ、口耳の間は則ち四寸のみ、曷ぞ以て七尺の軀を美にするに足らんや。

といつたのは殊に今の吾等の身に適切である。耳より入つて口より出す四寸の間をのみ學として居る間に、世相は益々險惡になり、吾等の生活も日々に無意味に近く思はれて來るのである。吾等は自ら胸中に對立する二つの心の正體を能く能く調べて、何れに就くべきかを思ひ定めなければならぬ。これ卽ち自ら救ふ所以であると共に、また他を救ふ所以でもある。

人心と道心

東西洋數千年に亙つて世に現はれた幾多の敎へは、畢竟此の二つの心の處置を示すために說かれたものとも考へられるのである。書經の中に舜が位を禹に傳へんとして之に命ずる語を擧げて、

人心惟れ危く道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に其中を執れ。

とある。蔡沈の之を釋した語に『其の形氣に發するものを指して言へば、則ち之を人心といふ。其の義理に發するものを指して言へば、則ち之を道心といふ。人心は私なり易く公なり難し、故に危し。道心は明なり難く昧み易し、故に微なり。……道心常に之が主となり、人心命を聽けば則ち危き者安くして微なる者著はれ、動靜云爲に自ら過不及の差なし』といつたのは略ば其の要を悉して居る。還初道人の『菜根譚』の語は前にも引いた

が、その中に、

耳目見聞は外賊たり、情欲意識は內賊たり。只是れ主人翁惺々不昧にして中堂に獨坐すれば、賊すなはち化して家人と爲る。

といつてあるのは、前の蔡沈の語と相俟つて甚だ有益な語である。心の主人なるものが確立すれば、種々の妄想は自ら消え去るべきである。孔門の敎へに於て常に君子と少人との別を立て、人々をして皆共に君子たるべき目的を以て修養を勵ましめたのも、要するに道心が心の主となり、人心がその命を聽くといふ樣な境界に到達せしめんとしたに外ならぬのである。勿論孔門の學なるものは孔子自ら『述べて作らず信じて古を好む』といつた通り、所謂先王の道を本として立てられたものである。先王の道は一般人民の幸福を增進することを主要とするものである。書經の『皐陶謨』に、

競々業々一日萬幾、庶官を曠しくする無かれ、天工人其れ之に代る。

とある。天は萬物を生じ又萬物を護つてその生育を遂げしむるのである。人は天に代つてその化育の功を贊くべきものである。それ故に如何なる低い地位をも輕んぜず、各その責を果すやうに努力しなければならぬとの義である。されば世のため人のために出來るだけ多く役立つやうに努むるのは、君子の志でなければならぬ。曾子が自らその志す所を述べて、

以て六尺の孤を託す可く、以て百里の命を寄す可し、大節に臨んで奪ふ可からず。君子人か、君子人なり。

といつたが、此の如き人をこそ眞の君子といふべきであらう。前にも引いた佐藤一齋の言の如く『天は何故に此身を此世に出生したか』と省察し『苟くも生くべからず』と常に自ら勵むは、道を學ぶ者の當然の責である。

しかし其志ありながら實行の機を得ずして終るものもある。人生は甚だ

遇と不遇

複雜である、時勢は限りなく變化する。吾が實際有する所の力量を世に認められぬことも多い。斯ういふ時に兎角不平の念の起るものであるけれども、或は自分も他の人の實際の力量を知らずして過ぎたことが少くないかも知れぬ。されば孔子の所謂『人知らずして慍らず』といふは君子の襟度として最も望ましいものである。又普通の考へによれば不遇な人は甚だ氣の毒である、時に遇へる人は幸福であるといふのであるが、大觀すれば必ずしもさうでない。例へば『孔子の聖なるも時に遇はず』といつて、昔から其の不遇を悼むのであるが、孔子の不遇は果して不幸であつたらうか。孔子は空論の人でなく確かに實際の事に當るべき力量を具へて居たと思はれる。其の定公の知遇を得て國政に參し、三月にして目覺しい成績を擧げたところから推して考へれば、齊楚の如き大國が若し孔子を用ゐ、孔子の志す所を行はせたなら王道大に興り、天下は昇平に赴いたかも知れぬ。そ

幸か不幸か

の代りに弟子を集めて道を講じ敎へを與へる暇は全く無くなつたであらうから、儒敎の大成せらるゝことは望まれなかつたであらう。論語も春秋も易も詩經も後世には遺らなかつたであらう。孔子がたとへ志を得て泰平を致したにせよ、數百年の後にはその化が盡きて又騷亂が起るにちがひない然るに儒敎は孔子を祖として數千年後の今日に至るまで多くの人の心に極めて大なる感化を與へて居る。これ實に孔子が不遇であつた爲の賜である。孔子其人には氣の毒であるが、吾等は寧ろ孔子の不遇であつたことを祝福したいと思ふのである。

それ程遠い昔を考へずとも、近く吾が國の維新前の志士に就て見ても同じことが言へるであらう。吉田松陰が其の希望通り海外へ航することが出來たなら、松下村塾に於て有爲の子弟を敎育し彼が如き大なる感化を與へることは出來なかつたであらう。渡邊崋山が田原に幽囚の身とならなかつ

たら、彼が如き名畫の多くを今日に遺すことはなし得なかつたであらう。不遇なのは其人に取つて誠に悲しいことであるけれども、後世の人の之によつて受くる所の利は却て大なるものがある。廣い意味に於て人生に貢献する所の大なのは却て不遇の人に於て多く見らるゝのである。さればとて故らに不遇ならんことを望むにも及ばぬことである。要するに己に在る所のものを務めて、遇と不遇とは之を自然に任せるといふ覺悟をもつことが大切である。中庸に

己に在るもの

君子は其位に素して行ひ、其外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子は入るとして自得せざる無し。

とあるは至言である。斯くありてこそ如何なる境界に在つても意義ある一生を送ることが出來るのである。

本末を誤つてはならぬ

心を養ふといふことの強味は全く此處にある。草でも木でも伸びて行くのは愉快なものである。樫の實の一粒を地の中へ埋めて置くと、やがて中から若い芽が出て來る。その軟い芽は堅い樫の實の皮を突き破り、又堅い地殼を突き破つて大地の上へ出る。さうして大空に向つてズン〳〵と伸びて行くのである。その伸びて行く力によつて、軟い芽が凡ての堅い物に打克つのである。小い五尺の軀、五十年の生命に囚はれぬ所の吾等の心が伸びて行くさまも亦た斯の如くなるべきである。天下國家に貢獻するとか、有爲の人になるとかいふのも、此の根本の力の發顯でなければならぬ。心は本である、外に現はれるのは末である。己に在るものを養ふのが本である、外に顯はれて人に認めらるゝのは末である。此の本末輕重の關係を誤つてはならぬのである。荀子は此心を養はんが爲に道を學ぶの必要を說いて、

目は之を五色よりも好み、耳は之を五聲よりも好み、口は之を五味よりも好み、心は之を天下を有つよりも利なりとす。是故に權利も傾くること能はず、群衆も移すこと能はず、天下も蕩すこと能はず。生くるや是に由り、死するや是に由る。夫れ是をこれ德操といふ。德操にして然る後に能く定まる。能く定まりて然る後に能く應ず。能く定まり能く應ずは其全を貴ぶなり。

能く定まり能く應ず

といつて居るが、眞に名言である。殊に『能く定まり能く應ず』とあるは大切なことである。定まるとは吾が心の定まるのである、應ずとは能く物に應ずるのである。內に定まる所があるから、外物に應じていつも其の宜しきを得るのである。『君子は器ならず』といふのも萬能に達してゐるをいふ意味ではなく、如何なる境遇にも安んじ得ることをいつたものでなければならぬ。

佛敎に於て說かるゝ所の悟りも畢竟する所は、如何なる境界にも安んじ得る心を作る事と思はれる。佛菩薩の德を讃して或は『遊戲自在』といひ或は神通力を具するといひ、或は

風の空中に於て一切障礙無きが如し。——法華經、神力品

といひ、或はまた

遊行するに畏れ無きこと師子王の如し。——同、安樂行品

といつてあるが、何れも同じ心をいつたものである。世を救ひ人を導くことは固より佛の世に出られた本懷であるが、自ら救ひ得ずして人を救ひ得るものはない、自ら思ひ惑ひながら人を導き得やう筈はない。外に顯はれて貴い事となるには內に積まれたる德の貴いものがなければならぬ。されば

先づ自己より

百の佛寺を作るは一人を活かすに如かず、十方天下の人を活かすは意を守ること一日なるに如かず。――馬意經

といふ語もある。人を活かすは貴い業であるが、多くの人を活かす力は吾が心一つより發すべきである。吾が心を作ることを努めずして、徒に人を活かさんことを望むも益はない。先づ自己を全うすることよりしなければならぬ、自己よりして推して天下に及ぼすべきである。

儒教に於て二つの心の對立を認むると同じく、佛教に於ても二つの心の對立を認めて教へを立てる。卽ち凡夫の心と佛の心とである、卽ち煩惱と佛性とである。如何なる佛も最初は凡夫であつたのである、最初はその心が煩惱に充されて居たのである。又如何なる凡夫も修業を怠らなければ終には佛と成るべきである、終には凡ての煩惱を除き得べきである。それ故に天台大師は修業に就ての心得を說いて、

凡より聖

凡に始まりて聖に終る。凡に始まるが故に疑怯を除き、聖に終るが故に慢大を除け。

といつた。凡とは凡夫のこと、聖とは佛のことである。疑怯とは自分の力を信ぜず、自分などは到底佛に近いものにはなれまいと疑ひ且危ぶむことである。如何なる佛も菩薩も凡夫から始めて修行を積んだものであるから自分が今凡夫であるからとて疑怯の念をもつてはならぬのである。慢大とは自分の知り得たる所に誇つて獨り得意を感じて居ることである。佛の境界に到達するのが修行の終りで、それ迄は決して努力を止めてはならぬ。たとへ多少は知り得たる所があつても、佛に比べては數にも入らぬものである、それを誇るやうな心持があつてはならぬのである。佛とは梵語の『佛陀』を略していふので佛陀とは覺者の義である。隋の慧遠の著はした『大乘義章』の中に之を說明して、

覺者

既に能く自ら覺り、復た能く他を覺らしめ、覺行窮滿す、故に名けて佛といふ。

とある。されば覺者とは『眞によく覺つた』人といふ意であると共に『能く人をして覺らしむる者』といふ意でもある。佛になつて初めて二つの心が全く一つになるので、それ迄は幾分なりとも煩惱が殘つてゐるから、折々は心のよろめくを免れぬわけである。

されば佛敎に於ては、心は恐ろしいものであるともいひ、又心は貴いものであるともいつてある。恐ろしいといふは煩惱に就ていひ、貴いとは佛性に就ていふのである。

心相は是れ大患の本なり、是の心をして自在なることを得せしめざれ。

——寶雲經

といひ、或はまた

慎みて汝の意を信ずること勿れ、意は終に信ずべからず。——四十二章經

といふの類は煩惱の心をいふのである。小き自己に執着し、眼前の得失利害に囚はるゝ心をいふのである。雜譬喩經の中に面白い譬喩譚がある、吾が國の松山鏡といふ譚は之より脫化したものと思はれる。昔或る長者の子が新に妻を迎へて甚だ相敬愛して居た。一日夫はその妻に向ひ『厨に入つて酒を取つて來てくれ、共に飲まう』といつた。妻は厨に入り酒瓶を開くと、中に自分の姿が映つた。それを自分の形とは氣附かず、夫が若い女を隱して置くのであると思ひ、室に歸つて散々夫に怨言を陳べた。夫は不審に思ひ自ら厨に入つて酒瓶を見ると、自分の姿が酒に映つた。そこで室に歸つて妻に向ひ『汝は自分で若い男を隱して置きながら、却て吾に怨みをいふとは不埒だ』といひ、夫婦互ひに激して相爭つて居た。其處へ一人の出家が來て、何故に相爭ふのかと問ひ、自ら厨に行つて酒瓶を見ると、自

心が苦を作る

分の姿が映つたので事の眞相を知り、喟然として嘆息し、

世人愚惑にして空を以て實となす。今汝等が爲に甕中より人を出すべし。

とて、大なる石を取つて酒瓶を打壞した。瓶が壞れて酒が皆漏つてしまふ

と人の影も見えなくなつた。夫婦は之を見て各心に慚愧の念を生じたので

出家は彼等の爲に法を說いて道に入らしめたといふ。世間の人の相爭ひ相

惱むのは此の夫婦の如きものである。皆自らその心の煩惱を除き難きため

に累ひを增し苦みを多くして居るのである。

貴い心の力

心は斯く厄介千萬なものであるが、又限りなく貴いものでもある。其の

貴いことを多くの經の中に稱へてある。その一二の例を出して見ると、

三界は心を以て主と爲す。能く心を觀ずる者は究竟涅槃を得、觀ずる能

はざれば沈淪す。心は猶は大地の五穀を生ずるが如く、菩薩及び佛の位

を生ず。——心地觀經

といひ。或は

一切衆生の心性は本淨し、煩惱の諸結も染着すること能はず。猶ほ虛空

の玷汚す可からざるが如し。——大集經

といふが如き語が夥しく見えるのである。大空に雲が滿ち亘つた時には、

一面に薄黑く見えるけれども、雲が空を汚してしまふことは出來ぬ。雲の

散じて後の空は依然として靑々として居るのである。吾等の心もまた其の

如くで、煩惱に充されて居る時には樣々の罪を作り過を重ぬるけれども、

煩惱が心を染め盡すことは出來ぬのである。故に煩惱を除いて後の心は淨

く明かなること滿月の如くで、

心性の淨きこと水中の月の如し。——寶積經

といふやうな語もある。斯く淨きところの心性、卽ち佛性である。

覺るとは卽ち煩惱を掃つて佛性を開發して行くことであるが、自ら覺り

一足飛びにはさとれぬ

得たものは又他を覺らしむることも出來るにちがひ無い。但し覺るといつても決して一足飛びに覺れるものではない。頓悟といふ語もあるけれども、それは久しい修行を積んで後に或る急處が分ることである。久しい努力を積まずに頓悟などの出來るものではない。煩惱に充ちた心を懷いて居るものは宛も眞暗闇に居るやうなもので、佛は宛も光明の中に立つが如きものである。此の眞暗闇から光明の方へ向つて一歩一歩と進んで行けば、その歩を運ぶに隨つて少しづゝ明るくなつて行くのである。但し其の途中で横へ外れたり、立止つたり、後へ返つたりするものもあるが、其等の間違ひを自ら氣附いて又元の方角へ向き直り、一歩より二歩三歩と進んで行けば次第に明るくなるのである。明るいと暗いといふは全く別のことであるけれども、而も續いて居る境界なのである。譬へば熱いと冷いとの續いて居るやうなものである。氷點の水を少しづゝ溫くして行けば終に沸騰點に達する。沸騰點に在る熱湯を少しづゝ冷して行けば終には氷點に下る。その間は續いて居るのである。迷悟の境もまた斯の如くに續いて居る。迷ふ者といふは卽ち未だ悟らぬものである。悟るといふ中にも段があるから、下から見て悟つた人は、上から見てまだ迷つて居る人といへやう。惡とは未だ善ならざるもの、邪とは未だ正ならざるものといつて宜い。吾等は一足飛びに佛のやうな境界には入れぬが、平生に於て最も大切なのは自分の心が明るい方に向つて居るか、暗い方に向つて居るかを注意することである。

迷悟の境は續いて居る

自覺と覺他

自分が迷つて居て人を導くことは出來ぬ、自分を救ひ得ぬものが人を救ひ得やう筈はないと前にいつた。ところが全く迷ひの無くなるといふのは容易なことでない。眞の覺者は佛である、佛ならぬものは未だ心の何處かに迷ひの暗い影が殘つてゐるのである。されば吾等が眞の覺者となつて後

に他を覺らしめんとするならば、恐らく吾等は他を覺らしむるために力を用ゐる事無くして終るであらう。實際に於てはそんな迂遠なものでなく自覺と覺他とは相俟ち相助けて進んで行くのである。少しでも自分の心が明るくなつて其の悅びを感ずるならば、他の多くの人が眞暗闇にうろついて居るのを見て深き同情を起さゞるを得ぬ筈である。さうして『共に明るい所へ……』と彼等を誘ひたくなる筈である。そこで彼等を明るい所へ導き入れてやりたいと苦心し努力するならば、その努力によつて自己の具有せる佛性が開發せられて、自覺の力がそれだけ增して來る。自覺の力が增せば又覺他の働きがそれだけ多く出來る。それが又自覺の力を增す因となる。斯ういふ風に自覺と覺他とは互ひに因を爲して進んで行くべきである。此の如き態度を以て修行を勵むのを菩薩といふので、卽ち華嚴經に

互ひに因を爲す

心廣大無量にして悲愍を具足し……衆生を捨てず、諸佛の大智を求め……

とあるのが眞の菩薩の心である。菩薩といふは『菩提』といふ語と『薩埵』といふ語を結びつけて出來た語で、『菩提』とは卽ち覺ること、『薩埵』とは卽ち人のことである。されば菩薩とは『覺る人』の義である。吾等と雖も自覺と覺他とを併せて修行しやうといふ牢乎たる決心さへあれば、菩薩の仲間入りが出來る筈である。

唯だ此處で大に戒めなければならぬのは、他の人を導く地位に在るために、自分を振返つて見ることが等閑になることである。孟子が『人の患ひは好んで人の師と爲るに在り』といつたのは痛切なる語である。人の爲に道を說くに當つては特に深く自ら省る所がなければならぬ。若し自分の傳へたことの爲に他の人を誤るならば、大なる罪を犯せるものである。されば曾子の如きも『吾日に吾身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを傳ふるか』といつて居る。習はざる

を傳ふるとは卽ち自分で充分に習熟して居ないことを人に傳ふることをいふのである。若し佛の敎へを人に傳へて、それが佛の本意に合せぬならば彼の人を誤り且佛を辱むるもので、實に二重の罪を犯して居ることになる大に戒むべきは此處である。いろ〳〵の經論の中に魔を降すとか魔を防ぐとかいふことが說いてあるが、殊に恐るべき魔は自ら足れりとするの心である。『華嚴演義鈔』に十魔を擧げた中に、

恐るべき魔

七に善根魔。八に三昧魔。九に善知識魔。十に菩提法智魔。

とあるのは尤も修行の人に適切である。善根魔とは自ら多少人の爲に力を盡し善根を植ゑたことに心驕り、修業が行き止りとなつてしまふことである。三昧魔とは自ら禪定を得たりとして心驕り、進修の道を求めぬことである。善知識とは人の師たることである。人の師たることに得意を感じ、自己の修養に力を用ゐぬやうになるのを善知識魔といふのである。菩提法智とは卽ち佛道に於ける智慧である。未だ完全なる智慧も具はらぬに、自ら知り得たる所に驕るならばそれで行き止りになつてしまふ。卽ち其の智が却て魔となるのである。

自ら足れりとせぬ心

古來より高僧碩德として仰ぎ貴ばれ、世間の人に大なる感化を與へた人は、皆自ら足れりとせずして進修を求めてやまぬといふ念を生涯持ち續けたやうである。天台大師のことは前にもいつたが、大師は陳の光大元年三十歲にして金陵の都に入り、大建元年三十二歲の時から數年間瓦官寺に住した。此間大師の德を慕ひ來つて敎へを請ふ者は踵を接し、大師が法華經を講じた時には宣帝の勅命により一日朝を廢して、群臣をして往いて聽かしめたといふ。然るに大師は此の得意の絕頂ともいふべき時に於て深く自ら省み、猶ほ深く究めて佛の眞の精神を發揮せんためには、斯る華やかなる生活を離れなければならぬと決心し、大建七年三十八歲にして天台山に

入つたのである。今日天台宗の敎學の遺つて居るのは、實に大師が華やかなる金陵の生活をすて、飢寒を忍びつゝ天台に山籠りしたる賜といふべきである。又吾國でも道元禪師が京都の華やかな生活をやめて、越前の山中へ引籠つたる如きも、天台とその心事を同じうするものであらう。禪師は安貞元年二十八歳にして宋より歸り曹洞の禪を傳へたのであるが、最初は京都の建仁寺に居り、後正覺禪尼の建立したる深草の興聖寺に入つてその第一世となり、公家と武家との歸依を一身に集めたのであるが、退いて自ら修むるの望みが熾であつた爲に、寛元元年四十四歳の時に波多野義重の招きに應じて越前へ退いたのである。

世を避けたは何故か

固より大乘の佛法を學び菩薩の道を勵むものは佛の御心を以て自己の心とし、一切衆生の惱みを救ふことを志とすべきに定まつて居る。それに繁華の都を去つて或は山に入り、或は僻村に隱れたのは、決して衆生を救はんが爲に努力することを厭うたのではない。自身が佛の眞の精神を捉へ得ずして人を敎へ、却て人に禍せんことを恐るゝの念が强かつたのである。是こそ眞の慈悲心である。自己を完成せんとするのは卽ち眞に世を救ひ人を濟ふ所以である。法華經を讀んで見ると、釋尊が靈鷲山に於て此經を說かるゝ最中に、上行菩薩を首として多くの菩薩が其前に現はれた。時に釋尊は此等の諸菩薩を稱して、

靜なる處を志樂し、大衆の慣鬧を捨てゝ所說多きことを願はず。

といふと共に、また

志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種々の妙法を說て其心畏るゝ所無し。

とある。一方では人の爲に多く說くことを好まぬといひ、一方では妙法を說いて畏るゝ所なしといふは、一見して矛盾のやうであるが、此處に深い

求めぬ心

意義が存するのである。

説くことを好まぬといふは卽ち知られやうと思ふ念が無いのである。世に對し人に對して求むる所がないのである。しかしながら世間の人が唯だ眼前の小事にのみ沒頭し、自ら苦を作り自ら惱みの種を多くして居るのを見ると、どうしても打棄て置くことが出來ないから、之が爲に法を説き、救ひの道を開いてやることに努力するのである。求むる所がないといふは何よりの强味であつて、『畏るゝ所なし』といふ力は此より生るゝのである。彼の諸葛孔明が二十七歳にして蜀の宰相となり、多くの老將を指揮命令して天下三分の計を立てたのは、固よりその非凡なる識見材幹によることであるが、一には其の求むる所無きことが凡ての人によく知られて居た爲でもある。彼は自ら言つたやうに、閒達を諸侯に求めず、南陽の野に耕して居たが、劉玄德の三顧によつて已むを得ず世間へ出たのである。而して蜀の宰相となつて後も極めて簡易質素な生活に安んじ、又何時でも職をやめて南陽へ戻り農夫の生活が出來るやうに計畫を立て居た。それ故に彼は自ら信ずる所を行つて少しも恐れず、周圍の人もまた彼が寸毫も一身の爲にせず唯だ國家の爲に謀るものであると知つて居るから、威令が能く行はれたのである。自ら世に對して求むる所なく、唯だ世のために力を盡すといふ一念から、身命を抛つも厭はぬといふ決心が生れる。老子の所謂慈なるが故に能く勇なる者である。彼の諸菩薩が其心に畏るゝ所なしといふも之が爲である。

求めぬ心の悦び

諸菩薩は志念力堅固であつたといふ、志念力とは卽ち自ら佛の境界に到達し、一切衆生を救はんとの志念力である。常に智慧を勤求したといふ、智慧とは卽ち佛の智慧である、常にといふは撓まず緩まぬのである。既に世に對し人に對して求むる所がないから、心を專にして道を修め智を磨く

ことが出來るのである。而して一切衆生を救ふ所の洪大なる力が此中から自ら湧き出るのである。此處に無限の悅びが感ぜられ、何にも換へ難き滿足が感ぜらるゝのである。此の悅びは譬へば籠の中の鳥が自由の身となつて空高く翔る時に感ぜらるゝ悅びである。眞に解放せられたる悅びである若し人に示さうといふ念があれば人の毀譽褒貶によつて吾が心を動さゞるを得ぬ。これ人の殷譽褒貶に支配さるゝものである。斯の如き人は自ら其心に毀譽褒貶といふ桎梏を加へて居るのである。若し又世に對し人に對して求むる所があれば、其の求むる所が得られやうか得られまいかといふ懸念の爲に、心は片時も安まらぬのである。これ卽ち利害得失によつて支配さるゝものである。佛弟子となつて世間の名利を離れ、一錢二錢の損得を爭ふものを冷眼に視ながら、却て自ら世間に認められたいといふ念に累ひせられ、彼の市塵の中に身を沒して揭得を失ふものと多く擇む所なきもの

解放せられたる人

となり果つるは哀しいことではないか。斯る哀しい、不自由極まる境界を脫し得るならば、久しく狹い籠の中に居た鳥が濶い空に羽を伸す時の悅びを感じ得べきである。

一たび籠から出て空を飛んで見ると、空は限りもなく濶いのである。一丈や二丈のところに囚はれて居る必要はない、いくらでも高く、いくらでも遠く飛ぶことが出來るのである。人に示すの念なく世に求むるの心なく唯だ吾が身の力と心の力とを限りなく發展せしめて、佛の境界に到達するまで進み進んでやまぬのが菩薩の修行である。菩薩を譯して『大士』といふは大心の士との義である。自ら佛と一致するまで進まう、さうして一切衆生を救ふべき力を具へやうとして勵むほど大なる心は他にあるまい。大士の名あるは宜なりといふべきである。斯ういふ曠々とした心をもつて修行を續けて行くならば、如何なる境遇に身を置くとも其の境遇の爲に制せ

遊行無畏

らるゝことはない。これが眞の解放せられたる人である。經の中に

火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず。――法華經、藥王品

といひ、或は前に引いたやうに、

刀杖も加へず、毒も害すること能はず。……遊行するに畏れ無きこと師子王の如し。――同、安樂行品

といつてあるは、よく斯る程度にまで達し得た人の自在なる有樣を說き得たものである。

希臘のストア派の哲學者は（ツエノーンを唱首として紀元前三世紀に榮えた學派である）專ら自由の人となるべき道を說いて居るが、その自由の境界に到達し得る道はといへば、たゞ嚴肅なる責任觀念の中よりして開かるゝのである。『自然に從ひて生活せよ』といふのが彼等のモットーである。自然の大なる力は吾等の心に理性となつて現はれて居る。理性に從ふは卽

ストア派の自由說

ち自然に從ふ所以である。鳥は空を飛ぶが卽ち自然に從ふ所以、魚は水に浮ぶのが卽ち自然に從ふ所以、人は理性に從つて生きるのが卽ち自然に從ふ所以である。これ卽ち吾等の人として共に有する所の責任である。能く此の責任を自覺して行動するものは、他に對し求むる所なく、自らその責任を全うし得たる點に眞の滿足を感ずべきである。眞の自由の人とは此の如きをいふのであるといふのが卽ち彼等の主張の大綱である。其の說く所は之を大乘佛敎に比して甚だ疎くして淺きの感が無いでもないが、自由といふことの意氣を明にしたところは確かに傾聽に値するものである。彼等もまた二つの心を一つにすることの必要を感じて起つたのである。社會が益々複雜になり、人々の欲望を唆るべきものゝ數が益々多くなるに隨ひ、右へ惹かれ左へ惹かれて心は更に定まらず、よろめきながら人生の行路をたどる者のみとなつた時に、彼等ストア派の人々が起つて、覺醒を促した

のである。羅馬時代に至り名君、名將、大政治家といはれた人々の中に此派の説を奉じた者の甚だ多かつたのは謂あることである。

以上は東西古今の多くの貴い敎への中に就てホンノ一端を窺ひ得たに過ぎぬものであるが、二つの道に惑かれて居る吾等の心を一つに向はしめんとすることが、即ち敎へといふものの立てられたる目的であることはほゞ明であらうと思ふ。耶蘇が弟子に向つて、

地に泰平を出さんが爲に我來れりとおもふなかれ。泰平を出さんとに非ず、刄を出さん爲に來れり。夫れ我が來るは人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり。人の敵は其家の者なるべし。

といつたのは甚だ極端なる言の如くに思はるゝけれども、便宜的の生活に甘んずるの非を痛擊して、人々をして道を求むるの大勇猛心を起さしめんとの精神に出るもので、其の叱咤の聲には無量の涙が含まれて居る。二つに惑かるゝ心を一つにするためには、固より大勇猛心を振ひ起すことが必要なのである。

第十七章　天の力と人の力

デカルトの夢

歐洲近世の哲學は佛國のデカルトを祖とするものといはれて居る。彼は佛國の或る門閥家に生れ、少年の頃はジエスウイト派（基督敎の一派）の學校に入つて哲學及び物理學數學等を學んだのであるが、漸く人生の問題に就て疑ひを懷くに及んで、斯る形式的の學問では到底滿足の出來ぬことを痛感した。それで何か一生懸命のことをやつて見たいといふ考へから、パリーの都へ出て武藝を習ひ、武士階級の人々と交つて居たが、それも眞實味の少いことが分つて來るに隨ひ、全く興味が無くなつてしまつた。それから暫くは交友を謝して閑地に退き、獨り思索に耽つて居たけれども、

實際の世間を充分に觀察せずして獨り思索するも得る所は無いといふ點に氣附いたので、志願して兵士となり、折しも勃發したる三十年戰爭に參加してノイブルグに赴いた。其處の兵營で冬籠りをして居る間に、自分の天職は學問の研究に在ることを初めて自覺すると共に、學問研究の新方針に就て大に悟る所があつた。それは一六一九年十一月十日であつたといふ。即ち彼が三十歳の冬である。其夜の夢に聖母マリアの姿を見て、心に愈々深き悅びを感じた。彼はそれよりプラーグの攻擊及び匈牙利への進軍に加はつて後佛國へ歸り、家事を整理して學問研究の新しい途に入つたのであるが、其時にロレットに在る聖母マリアの廟に詣で宿願を果さんことを祈念し、それより和蘭に居を卜して靜かに研究に取掛つた。近世哲學の澎沛たる大潮流は、彼が和蘭に於ける寂しき思索の中にその源泉を有するものである。

此の一話は吾等に或る深き暗示を與ふるものである。デカルトの名は、彼の唱へたる有名なる標語の『吾思ふ故に吾存在す』と共に永く記憶せらるゝのであるが、彼の斯る深き內省の中には聖母マリアの氣高い姿が通つて居たのである。十七八歳の頃から三十歳の冬まで彼の心は右へ左へと常に動搖して居たのであるが、その進むべき一條の道が明かに見出された時に、彼は聖母マリアの力が自己の心に宿れることを感じたのである。此より後の彼は其の一條の道に向つて勇往邁進した。彼は自分が人間以上の力によつて導かれて居ることを信じたが故に、もはや左へ右へと動搖することが無くなつたのである。耶蘇は人々に向つて『我を信ずる者は我がなす所の事をなさん。且此れより大なる事をなすべし』といつた。それは彼を信ずる者の心には彼の父なる神の力が通ふからである。神の力によつて導かるゝものは必ず大なる事をなすべきである。デカルトが聖母マリアを

見たといふは、實はマリアの姿を通じて神を見たのである。神によつて導かれたる彼は、近世哲學の發展の途を開くといふ眞に大なる事を爲したのである。

吾が心が人間以上の大なる力と通ひあつて居るといふ、此の確信はまことに貴いものである。その大なる力を神と呼び、佛と呼び、或は天と呼ぶ。その名はいろ〳〵異つて居るけれども、それは一の大なる活きた力として考へられ、貴ばれ、又賴りとせらるゝのである。基督教に於ては愛と信と希望との三つを殊に重んじ、神を愛し神を信じ、且神によつて護らるゝ自分達の前途に大なる希望をかけて居るによつて、意義ある生涯が送られると教ゆるのであるが。これは何人にも適切なる教へといふべきである。佛教の方では佛に對して禮拜する時に『南無』といふのであるが、南無とは梵語であつて漢譯して『歸命』といふ。然るに隋の嘉祥大師は之を釋して

活きた力

南無といふこと

『南無とは歸命なり、救我なり』といつて居る。此意を推して考へると、佛の洪大なる智慧と洪大なる慈悲とを仰ぎ貴ぶと共に、自分が之によつて救護を受くべきことを信じて、佛に賴るのであるから、基督教でいふ所の愛と信と希望とが『南無』の一語中に悉く包含せられて居ると見るべきである。儒教や道教に於て天といふも空漠にして見限れぬ天のことではなく活きた力としての天をいふのである。孔子は性と天道を言ふこと至て稀であつたといふが匡人の爲に迫害せられては『天の未だ斯文を喪さゞるや匡人其れ予を如何せん』といひ、當世にその志を得ざるを怨みずして『天を怨みず人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は其れ天か』といつたのを以て見れば、その至誠の天に通ぜることを自信し、そこに滿足を感じて居たことは疑はれぬ。

一の宗教が起つて多くの人の心を支配するに至るには、必ずその宗教を

宗教の要求

創めた人の崇高偉大なる人格の力に俟たなければならぬ。其等の人は幾百千年にして初めて出る所の人傑である。釋迦といひ耶蘇といひ、マホメットといひ何れも皆さうである。しかし如何なる偉人と雖も無より有を生ずる力をもつて居るのでは無い。若し多くの人の心に宗教を要求する所の念が全くないならば、如何に此等の偉人が身命を擲つてその教へを弘むるとも、その効なくして終つたであらう。此等の偉人は何れも一般の人の心の底に皆宗教を要求する念の潜在せることを認め、自分の努力の決して空に歸すべきものでないことを確信し　居たのである。固よりその努力の結果が一朝一夕にして現はるべきではない、多くの曲折を經、多くの苦難を凌がなければならぬのは勿論であるが、自分の與へた所の教へは後に至つて必ず大に發展し、不滅の生命を有すべきことを信じて居たのである。釋尊が非常なる苦心をして教へを弘めながら、諸菩薩の問に答へて、

如來は安樂にして少病少惱なり、諸の衆生等は化度す可きこと易し。疲勞有ること無し。――法華經涌出品

といつたのも實に之が爲である。

如何なる國民でも皆宗教をもつて居る。文化の程度の至て低い未開人の間にも必ず何かの信仰が行はれて居る。最初に現はれたる宗教は至て幼稚な價値の少いものであるけれども、斯ういふものゝ中から種々の高尚なる宗教が發達して來たのである。而して譬へば吾等の如き高等なる生物の體中にも、劣等なる生物であつた時の性質が尚ほ多く殘存して居ると同じく文化の程度の高くなつた後の國民の間にも、幼稚な信仰の殘存するを認むるのである。今極めて簡單に信仰心發達の徑路を觀察して見て、然る後に所謂信仰生活の特色に及ぶことにしやうと思ふ。

何れの國でも最初に發現したものは多神教であつて、その多くの神々は

最初の多神教

唯だ現世の利益を求むる者によつて拜まれるのである。前にも概略をいつた通り（第一章參照）未開時代に於て最も多くの人の頭を惱ましたものは生活の問題に相違ない。たゞ生きて居るだけでなく、出來るだけ安樂に生きたいといふのは自然の要求であるから、人々は皆有る限りの智慧を絞つて食物を求めたり、住む家を作つたり身に纏ふ着物を作つたり、いろ〳〵に努力したに違ひない。ところが人々は久しからずして人の力で何ものも出來るものでないといふことを知らなければならぬやうになる。雨が降つた爲に潤ひを受けて食物が多く出來ることもある、或はあまり多く雨が降つた爲に推流されて、食物を失ふこともある。風が吹いて涼しいと喜ぶこともある、風が吹いて家を倒したので大に難儀をする時もある。船といふものを工夫して、水による便利を喜んで居るうちに、水によつて船を覆されて生命を失ふものも出來る。此等の事を多く經驗すれば、どうしても此天地の間には人より勝れて大なる力があるといふことを認めなければならぬに至るのである。殊に不思議に思はれるのは死といふことである。四肢五體は元の通りであつて、その儘動かなくなるといふはいかにも不思議である。此の五體を動すものが何か中に有つて、それが無くなつた爲に動かなくなるのであらうと解釋するより外に途はない。その動かすものに心とか魂とかいふ名を付けたのは後のことであらうが、兎に角何か此の五體を動かすものがあるらしいといふ考へは、死んだ者を眼の前に見て直ちに起るにちがひ無い。そんな不思議なものがどうして人の身體に宿つたり、出て行つたりするのであらうか。何か人間以上に勝れて大なる力があつて、斯いうふ働きをするのではなからうか。

種々の不思議

斯ういふことを彼此思ひ合せて、その多くの不思議の元を皆神として仰ぎ見るやうになるのである。天地の間に不思議なことは極めて多い、隨て

讃歎の情

多くの神が認められるゝわけである。殊に日の光りに照されて育つたり榮えたりするものゝ多いことは誰も知る所であるから、太陽は特に有力なる神として仰がれる。印度でもアラビアでもエジプトでも希臘でも羅馬でも、昔は皆多神教であつた。但し人は唯だ生きて居るばかりで滿足するものでなく、美しいものを求めて之を玩賞するといふことも其の本性の要求である。されば美麗なもの莊大なもの等に出逢へば必ず心が之に惹かれるのである。洪水とか大火事とかいふものに出逢つた時には、危難が吾身に迫つて來るのに恐怖を感じながらも、なほその盛なる勢に對して一種の讃歎の情が動いて居ることは多くの人の實驗する所であらう。されば未開人でも日の出の景色とか、滿月の夜とか、或は大海に潮の湧き起るさまとかを見れば之を歎美するといふ情を起すのである。それであるから唯だ多くの力を神として認めるといふだけでなく、之を仰ぎ之をほめ稱へるといふ念が

現世の祈り

必ず加はつて居るのである。

斯くして多くの神が認められるゝと共に、人々は之に對して種々の事を祈るのであるが、その祈りは皆現世のことである。つまり自分達の力に及ばぬことを神の助力によつて果したいといふのである。眞の信仰といふものは自分の心の立て直しをすることが其の中心となるべきであるが、さういふ高尚なことは最初から分るものではない。最初はたゞ神に賴みをかけて助力を求むるのみである。其の助力といふのにも二樣の意味がある。一つは自分達の努力の結果が成るべく大きく現はれるやうにといふ願ひで、又一つには自分達の努力の結果が妨げを受けぬやうにといふ願ひである。吾國の古代の所謂『のりと』を讀んで見ても、例へば雨が程よく降るやうにあまり降りすぎて作物を損はぬやうにとか、風が程よく吹くやうに、草や木を吹き倒すほど荒くは吹かぬやうにといふ類の祈願の言葉が多く見出さ

新なる信仰の要求

れるのである。さうして賴みをかける以上は、其の誠心をあらはす爲に物を捧げ、又賴んだかひの有つた時には感謝の意を表するためにまた物を捧げるのである。しかし酒や餅を供へても更に減らぬから、果して神が受納せられたかどうか甚だ心許ない次第であるけれども、淨らかな宮殿でも建てゝ神に捧ぐる時には、髣髴として神が其中に來り宿るやうに思はれて甚だ心强い感じがする。それで何れの國民の間に於ても神に捧ぐる宮殿は殊に心を籠めて作られる。それが建築術や彫刻の發達を促す大なる力となつて居る。

何れの國の宗教でも此の程度のものから發達するのであるが、社會が次第に複雜になり、人々の思索力も進んで來ると、この程度の信仰では滿足し得ぬ者が段々と現はれて來るのである。それには凡そ二つの理由がある。一つは眼前に現はれたる多くの事實が斯る信仰を否定するのである。神を尊んで一心に祈願をしても更に幸福にならぬものがある。又少しも祈願などをせずして却て萬事都合よくなつて行く人がある。斯ういふ事實を多く見聞すると、神の護りといふことが更にあてにならぬやうに感ぜられて來る。殊に戰爭の場合などでは敵も味方も同じ神に勝利を祈願して居るのであるから、何れが勝つても問題は起るわけである。ホーマアの詩を讀むと、希臘人とトロイ人と戰爭をして雙方共に神の助けを祈るので、神の中に希臘を助けやうとする者とトロイを助けやうとする者とが出來て、いろ〳〵の爭ひを惹起したことが書いてある。今日讀んで見ると實に馬鹿らしく思はれてならぬ。

なほ一つの理由は吾等が勝手な賴みを神にかけるのは、神を辱むるものであるといふ思想が發起することである。希臘の哲學者の中にも、斯ういふ說を立てた人がある。神を敬ひ貴ぶといふ以上は、人が謹んで神の命に

神を侮つてはならぬ

從ふといふ念が無ければならぬ。然るに人々が勝手次第な望みを起して、その望みが遂げられるやうに神に祈るといふのは、宛も神を吾が同類か助手の如くに見做すものであつて、神を輕んじ侮る者といはなければならぬ。若し又人々が僅かな物を供へて祈るのに引かされて、その勝手次第な願を聽き屆けてやるやうな神ならば、貴ぶにも足らぬ神である。何れにしても神を唯だ人よりも力强いだけのものと考へ、之に對して敬虔服從の念の足らぬやうな劣等なる信仰が久しく勢力を保つ筈はない。神といふ觀念がめられ、神と人との關係にも新なる解釋が加へられなければならぬ時が到來するのである。

神の賞罰

斯くして新に起る所の宗教に於ては、嚴正なる吾等の審判者として神を認むるのである。吾等の一言一行は皆神によつて照見せらるゝのである。吾等は神の前に何事をも隱すことは出來ぬ。神は公平に嚴正に吾等を審判し、吾等の善行を賞し吾等の惡行を罰せらるゝのである。吾等は福を求め禍を避けんとして神に祈るも益なきことである。吾等の行ひが神意に叶へば神は其賞として吾等に福を授けられ、吾等の行ひが神意に反すれば、神はその罰として禍を降さるゝのである。故に福を神に祈るよりも、日々の行ひを愼んで神意に反せぬやうに努むるに如くは無しといふのである。斯ういふ思想を中心として立つ所の宗教が、前にいつたものに代つて勢力を得る。これ卽ち宗教の一進步である。希臘や羅馬に於ても漸次斯ういふ思想が現はれて來たが、其の最も代表的のものといふべきは古代イスラエル人の間に信ぜられたる宗教である。卽ち耶蘇の出る前のイスラエルの國教である。斯く吾等の審判者として神を仰ぐことになれば、是非とも多神教の狀態を脫しなければならぬ。若し多くの神が審判を下して、賞罰に統一がな

イスラエルの神

いならば吾等は就く所に迷はなければならぬ。されば審判者たる神は唯一の神であるべきである。若し多神教であつても、其中に特に有力なる神、即ち多くの神を統一する所の最上の神を認めなければならぬ。

イスラエルの國民の間には神がモーセに與へられたる十誡といふものが信ぜられて居たが、その第一條には『我は汝の神エホヴァなり、我のほか何者をも神とすべからず』とあり、その第二條には『汝偶像を作りて之を拜み之に事ふべからず』とある。審判者としての神なる以上は、斯く誡めらるゝが當然である。彼等は神を世界の創造者と信ずると共に、また彼等を治め彼等を護る者と信じて居たのである。『エホヴァ』といふは即ち『主』といふ意である。神が彼等を護るといふは唯だ彼等を保護し愛撫するといふ意ではない。彼等に不正があれば必ず嚴しく之を罰し、以て彼等を正しき道に導き入るゝのである。創世記にある大洪水は、即ち神が凡ての罪を犯せるものに對する徹底的の刑罰である。創世記の文には、

神世を視たまひけるに、視よ、亂れたり。そは世の人皆其道を亂したればなり。神ノアに言ひ給ひけるは、諸の人の末期我が前に近づけり。そは彼等の爲に暴虐世に滿つればなり。

とある。彼等の神は此の如くに嚴しい審判者なのである。

神の試み

イスラエル人は神意に背かぬやう、罪を犯さぬやうにと常に戒めあつたのであるが、幸福の日は容易に廻つて來ず、兎角逆境に在る時が多かつた。それでも彼等は神を怨んだり疑つたりしてはならぬと教へられた。自分達が種々の艱苦にあつて居るのは神に見捨てられたのではなく、神によつて試みられて居るのである。若し如何なる艱苦にあつても不平の念を起さず飽くまでも神を信じて居るならば、神はその誠心を照見して後には必ず大なる福を下さるゝであらうといふ信念をもつて、如何なる苦みをも晴れや

かなる氣分を以て堪へて行かなければならぬと、彼等は敎へられて居たのである。斯ういふ思想は後に基督敎の中にも充分に採り入れられてある。中世の敎會派の學者が七大罪といふものを說いて居る中に『幽鬱』といふのが數へてある。それは物事に不平を懷き快々として樂まぬといふは、神を信ずることの足らぬものであるから大なる罪だといふのである。

古代支那の天

支那の古代に於て信ぜられたる『天』といふのもイスラエルの神に似通つた所が頗る多い。天より陰陽の二氣が生じ、陰陽の二氣から萬物が生じたのであるといふのは彼等が夙くから信じ來つた所であるが、その天といふものは哲學者の所謂絕對とか本體とか、乃至はエネルギーとかいふものよりも寧ろ一の人格的實在の如くに思はれて居たやうである。それで『上帝』とか『造化者』とか『造物者』とかいふ語もある。此の天なるものは萬物の根元であるのみならず、常に吾等の上に在つて吾等を監視し、吾等の行ひに應じて賞罰を與へるものと考へられた。書經に

上帝は常ならず、善をなせば之に百祥を降し、不善をなせば之に百殃を降す。——伊訓

とある。常ならずといふのは、常に何人を護ると定まつて居るのでなく、其人の行ひ次第で或は之を護り或は之を棄つるとの意である。史記に出たる司星子常の語に『天は高きに處りて卑きに聽く』といふも之と同じ意である。易には

天道は盈るを缺いて謙なるに益す。——彖傳

とあり、又書經の中に夏の滅亡したることを說いて、

天道は善に福し淫に禍す。災を夏に降して以てその罪を彰はす。——湯誥

とある。詩經の大雅、板の篇にも

天の怒りを敬みて敢て戲豫すること無かれ。

とある。斯く天の審判を恐れ、敢て天意に違はぬやう日々の行ひを慎めといふ教訓は多くの典籍の中に散見して居る。

此の如くに人生の禍福を神によつて與へらるゝ賞罰と觀じ、各自に日常の行ひを慎むといふ考へは、福を神に祈るといふのよりも確かに進歩したものである。ところが彼のイスラエル人の中から耶蘇が出たり、支那人の中から孔子が出たりして、新に教へを説くことになると其の天といひ神といふ觀念が以前のとは大に變つて來て居るのである。斯く變へられなければならぬだけ、其の以前の思想は不完全であつたに違ひない。然らば神の賞罰が卽ち吾等の禍福であるといふ信じ方には、何處に缺點があるのであるか。第一に此の信念は事實によつて覆されんとする恐れがある。司馬遷は史記列傳のはじめに伯夷の傳を出し、その武王を諫めて首陽山に餓死したことを述べて、

天道は是か非か

或人曰く、天道は親なし常に善人に與すと。伯夷叔齊の若きは善人と謂ふ可き者か非か。仁を積み行を潔うする此の如くにして而して餓死す。且七十子の徒、仲尼獨り顏淵を薦めて學を好むと爲す。然るに回や屢空し、糟糠にだも厭かず。而して卒に蚤く夭す。天の善人に報施する其れ何如ぞや。盜跖は日に無辜を殺し人の肉を膾にす。暴戾恣睢、黨を聚むること數千人天下に横行す。竟に壽を以て終る。是れ何の德に遵へりや。……余甚だ惑ふ。もしくは所謂天道は是か非か。

といつて居るが如何にも尤も千萬である。此の如き例は何れの時代にも多く見らるゝことである。彼のイスラエル人の如く、艱苦に堪へて不平を懷かず、飽くまで神を信じて居れば、後には必ず幸になると教へられても、其の幸の來方があまりに遲く、且又神を信ぜぬものが多く榮えて居るのを見れば、辛抱我慢の力も折れてしまふのが人情として無理ならぬことであ

韋提希夫人の歎き

る。

釋尊の在世に摩竭陀國に頻婆娑羅王といふ明君があつて、后の韋提希夫人と共に深く佛法に歸依し、仁政を施して國民の仰ぎ慕ふ所となつて居たが、其子に阿闍世といふ惡逆無道のものがあり、王と夫人とは彼が爲に幽閉せられ、王は終に死んでしまつた。而して阿闍世が斯る暴虐のことを敢てしたのは提婆達多の誘惑に依るものである。その提婆達多といふは釋尊の從弟である。釋尊が韋提希夫人の幽囚中に之を慰問した時に、阿難が之に隨行した。阿難は提婆達多の弟であるが夙くより佛門に入り、釋尊の十大弟子の一人といはれた人である。韋提希夫人は之を迎へて感慨無量であつた。自分達夫婦は佛に歸依して善根を積みながら、吾が肉身の子の爲に苦しめられて居る。此の阿難は佛の大弟子となりながら兄のために常に迫害を受けて居る。現世の生活はまことに譯の分らぬものである。そこで夫人は釋尊の前にひれ伏して號泣し、

我むかし何の罪あつて此の惡子を生める。世尊また何等の因緣ましまして提婆達多と共に眷屬となりたまへる。唯願はくば世尊我が爲に廣く憂惱なき處を說きたまへ、我當に往生すべし。閻浮提の濁惡世をねがはず。——無量壽經

といつたが、誠に尤もなる歎きといはなければならぬ。善い行ひをして而も苦を受くる者が多ければ此世を『濁惡世』と斷定せざるを得ねわけである。

○

又吾等の了簡を以て神の賞罰を豫測するといふことが甚だ危險である。吾等が正しいと信ずる所を行つて、必ず神の賞する所となるであらうと定めても、それが果して神意に叶ふであらうか。吾が國では、『心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらむ』といふ歌が可なりに汎く

賞罰の豫測

知られて居るが、(之を菅公の作だなどゝいつて居るがそれは間違ひで、遙かに後世の作である。)誠の道に叶ふか叶はぬかを定めるものは吾が心である。若し吾が心に於て誠の道と定めた所が、神意に於て、誠の道と認められぬならば神は守らぬかも知れぬ。若し神のまもるべきことを豫期して居て、いつ迄も其の期待が實現されなければ、最初堅固であつた決心も次第に緩んで來るであらう。涅槃經の中に貧女の譬へがある。一人の貧女が諸國を流浪するうちに子を生んだが、旅宿の主人に追ひ立てられて其子を抱いたまゝ河のほとりに來かゝり、此河を渡つて他の國へ行かうと決心した。渡りかけて見ると流れは案外に急である。しかし愛する子を手放すことは出來ず、終に母子共に溺れて死んだ。此の母は子を愛する念の厚かつた功德により、天上界に生れて永く樂みを享けた。佛弟子たるものも此の貧女の子を愛するが如く、法の貴いことを知つて、生命にかけて信を凝すべきてある。即ち、『是の如きの人は解脫を求めずして解脫の自ら至ること、彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如し』とある。日蓮上人は此の經文を引いてその弟子を戒め、

豫期せぬに如くはなし

我並びた我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に佛界にいたるべし。

天の加護なきことを疑はざれ、現世の安穩ならざることを歎かざれ。

と『開目鈔』の中にいつて居る。實際これ程の大決心がなければ有らゆる艱苦の中を冒して、其の信ずる所を貫くといふことは出來ぬ筈である。幸福を期待して信を凝すとか道を守るとかいふのでは甚だ危い。

更に立入つて考へて見ると、禍福吉凶の區別なるものが甚だあてにならぬのである。神によつて與へらるゝ幸福とは果して如何なるものであるか。印度では國王となるのは前世に善いことをした報であると考へられたのであるが、雜譬喩經には或る國王が王位を棄て山中に入り、草茅を屋と

幸福とは何か

爲し蓬蒿を席と爲し、獨り道を修めて『快なるかな』といつて喜んで居たことが記してある。或人之に向つて、その樂む所を問へるに彼は答へて、

我王たりし時憂念する所多かりき。或は隣王の我國を奪はんことを恐れ、或は人の我が財物を劫取せんことを恐れ、或は人の爲に貪利せられんことを恐れ、又常に臣下の我が財寶を利して返逆時無きことを畏れたり。今我沙門となつて人の我を貪利する者なし、快いふべからず。

といつたといふが、大に道理ある言と思はれる。又貧しい者は富を得ることによつて幸福になるであらうと考へて居るが、富んだ爲に累ひを增した例は夥しくある。子の無いものは子を持つ人を羨むけれども、子を持つた爲に苦を增す人も世間には決して少くない。或人の歌に

もたずしてあらまほしきは子なりけり持たまほしきもまた子なりけり

とあるが、斯ういふ述懷をして居る人は世間に多いことであらう。されば假に神の賞罰がいつも正しく行はれて、正しい者に福が與へられ、不正の者に禍が下されるとしても、その吉凶禍福が更にあてにならず、遠くから見て福と思はれたものが自分の手に取つて見ればあまり福でもなく、或は最初は福と思はれても、久しい間にその中から種々の煩累が生じて來るといふやうな狀態ならば、神の賞罰も結極無意味に近くはないか。

生命の不滅

斯く種々の理由により、人生の禍福を唯だ神の賞罰とのみ見て、賞を求め罰を避けんが爲に行ひを愼むことを敎へる宗敎は其の權威を失ひ、更に之よりも高いものが要求せられて來るのである。尤も以上に擧げた中の第一の疑惑、卽ち『善人にして不幸なるものあり、惡人にして幸なるものあり、天道は是か非か』といふ疑惑だけならば、生命の不滅を信ずることによつて解決はつく。例へば

前世の因を知らんと欲せば則ち今世に受くる所のもの是れなり。後世の

果を知らんと欲せば則ち今生に爲す所のもの是れなり。――因果經

といひ、若くは

善惡の報は影の形に從ふが如し、三世の因果循環して失はず。此を空しく過ぎ、後に悔ゆとも及ぶこと無し。――涅槃經

といふが如く三世を一貫したる生命を認むることになれば、現世に於て善い行ひをして其の報を受けないでも、來世にその報があるから現世の努力は決して無にはならぬと信ぜらるゝのである。耶蘇が

正しきことの爲に責めらるゝ者は福なり、天國は卽ち其人のものなればなり。

といつたのも、現世の苦が來世に至つて酬ゐられることを敎へたのである。

或はまた支那の儒敎や道敎で敎へられたやうに、自ら善事を爲してその

積善の餘慶といふ思想

報を得ぬのは、福を子孫に遺すものであるといふ考へも、此の疑問を解決すべき力をもつて居る。卽ち『積善の家には必ず餘慶あり』といふ思想である。周の八百年の榮えは歷代に於て德を積んだ報であると解釋される。その祖先の后稷は舜と禹とに仕へて民に稼穡を敎へ、大なる恩德を施した。それより文王に至るまで積み來つたる德が武王以後に於て其の結果をあらはしたものと考へられて居る。武王が渭水のほとりで太公望にあつた時に『吾が先君太公よりして、當に聖人有りて周に往くべし、周因て以て興らんといへり。子は眞に是なるか』といつて、自分の車に載せて歸つたといふのは恐らく假託の說であらうが、斯ういふ話說が傳はるといふは偶然でない。司馬遷は項羽本紀の末に於て、

吾之を周生に聞く、舜の目は盖し重瞳子と。又聞く項羽もまた重瞳子と。羽豈に其の苗裔なるか、何ぞ興るの暴なるや。……天下を分列して

王侯を封じ、政羽よりして出づ、號して覇王と爲す。位終らずと雖も近古以來未だ嘗て有らざるなり。

と讃歎すると共に、

自ら功伐に矜り其の私智を奮ひて古を師とせず、覇王の業なりと謂ふ。力征を以て天下を經營せんと欲する五年、卒に其國を亡し身は東城に死し、尚ほ覺寤せずして自ら責めざるは過てり。

と非難して居る。要するに項羽の力量の非凡なることは認めるけれども、あまりに勢に乘じて德を積むことを思はなかつた爲に一代にして亡びたのを惜んだのである。司馬遷は伯夷傳に於て天道は是か非かと歎じたけれども、又翻つて天道の存在の否定すべからざるを思ひ、多く勞してその報を自身に收めぬのは、卽ち慶を子孫に傳ふる所以なることを認めたのであらう。斯く自分と子孫とを一つの生命の續きであるといふやうに考へるならば、たとへ三世を一貫する生命を認めずとも、なほ前の疑問に或る解決を與へ得るであらう。

更に深く考へなければならぬ

しかし問題はこれのみでは無い。その幸とか不幸とか、禍とか福とかいふものゝ本體が疑はしくなるのである。又三世を一貫したる生命を信ずるとか、積善の家に餘慶ありと信ずるとかいふのには、心に或る程度の餘裕がなければならぬのであるが、世間が非常に複雜になり、毎日の生存に甚しく骨が折れて來ると、後々の事までを考へる餘裕が無くなつて來るのは己むを得ぬことである。茲に於てか心の問題が凡ての問題の中心となるべき場合が到來するのである。幸福を外に求めても、その幸福は永く幸福たるを得ぬ。しかし幸福を欲求するといふ念は何人にも無くならぬのである。行ひを愼むとか道を守るとかいふことを考へる餘裕がないほど世間は切迫して來る。しかし行ひを愼まず道を守らぬものが多ければ、世間は益

々苦しくなるのみである。此の矛盾の中に於て、何とかして新しい道を開いて行かうといふには、どうしても人の心が新しくならなければならぬのである。賞として與へられる福を期待し、罰として加へられる禍を避けてゐるといふやうな態度ではいかぬ。自ら進んで眞の福を求め得るやうな心を作らなければならぬ。それには漫然と世間の正とする所を正とし、世間の善とする所を善とし、その正を履み善を行ふことによつて、祈らずとても神が守るであらうといふやうな、緩み切つた了簡で居てはならぬのである。モット深く考へなければならぬ。

聖賢の起る時

古來の聖賢の教へは此の大切なる時機に際して、人々に反省を教へ、人々の發憤を促さんが爲に說かれたるものである。孔子が位を失つて閑居して居た時に、儀の封人が來り見えて後諸弟子に向つて『二三子何ぞ喪へること（孔子が位を失つたことをいふ）を患へんや。天下の道無きや久し、天將に夫子を以て木鐸と爲さんとす』といつたのは、よく其時代に於ける孔子の地位を知れるものである。隱士桀溺は孔子が徒に心を勞するも其の効果の空しからんことを悼んで『滔々たる者は天下皆是れなり。而して誰か以て之を易へん』といつたが、孔子は之を聞て憮然として

鳥獸は與に群を同うすべからず。吾斯の人の徒と與にするに非ずして誰とか與にせん。天下道あれば丘與に易へざるなり。

といつた。人として生れて居る以上は人の爲に力を盡すより外はない。若し天下に道が行はれて人々の爲す所が正しければ、自分は強いて之を變易せんとするものではない。しかし吾より外に一世を覺醒せしむべき者がないから、已むを得ずして奮ひ起つたとの述懷である。耶蘇は豫言者ヨハネに續いて起つたのであるが、ヨハネは『我は卽ち主の道を直くせよと野に呼べる人の聲なり』といふと共に、耶蘇のことを人々に告げて『我に後れ

來りて我に優れる者とは是なり。我は其履の紐を解くにも足らざる者なり』といつた。而して耶蘇は

人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ。

と叫んで起ち、自己の地位を說明して、

我に就る者は我必ず之を棄てず。我が天より降りしは己の意のまゝに行はん爲に非ず我を遣はしゝ者の意のまゝに行はん爲なり。

といつた。世界の優秀なる敎へは皆此の如き人々の努力によつて立てられたのである。

先づ各自の心から立て直してかゝらなければならぬ。心が人を作るのである、而して人が世間を作るのである。各自の心を新にせずして世間が新になるものではない。バプテズマ（洗禮）を施して人々に悔い改むることを奬めたるヨハネが耶蘇のことを人々に告げて、

我は水を以てバプテズマを授く。……彼は聖靈を以てバプテズマをなす者なり。

といつたのは、耶蘇が人々の心を新にせんとして來れる者なることを證するものである。世間が次第に複雜になり、生存に骨が折れて來れば、誰も眼前の事より外は考へぬやうになるのであるが、しかし世間を斯く複雜ならしめたものは人々の心の作用であつて、責を他に嫁すべき筈はない。又生存に骨が折れるといふことには種々の原因があつて、その中には人の力を以て如何ともし難い事も含まれて居るやうに見える。例へば今の吾が國の如く土地が狹くて人々の夥しく殖える國に於ては、凡ての物資が國民の生活を支へて行くだけに足らぬのであるから、種々の困難が簇出するのも據ないことである。けれども之を吾等の力で如何ともし難いことであると云つて投出して見ても、吾等より以外に此の困難を救ふべきものが天から

降りもせず、地から湧きもせぬ。吾等のことは吾等自身の努力によつて何とかしなければならぬのである。要するに凡ての人の幸福は凡ての人の心の立て直し方によつてのみ增進せらるべきものである。

但し凡ての人が一時に覺醒するといふやうなことは決して望まるべきでない。何事も之を大成するには多數の力に俟たなければならぬが、その多數の力は少數の人の努力が元となつて作られるのである。中庸に

今夫れ天は斯の昭々の多きなり、其の窮まり無きに及びてや、日月星辰繫り萬物覆はる。今夫れ地は一撮土の多きなり、其の廣厚なるに及びてや華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩さず、萬物載せらる。

とあるが、何人も心を此に存すべきである。例へば一寸四方の空間は狹いものであるが、その狹いものが集つて萬物を蓋ふ天となる。一撮みの土は小いものであるが、その小いものが集つて萬物を載する地となる。一寸に

共に住む悅び

限られるのが空間の本性ではない。他の空間と共に洪大なる天を成すべき本性が一寸の空間にも存して居るのである。一撮みだけ別になつて居るのが土の本性ではない。他の土と共に曠漠たる大地を作るべき本性が一撮みの土にも存して居るのである。人にもまた此の如く小い自己に囚はれずして一切の人と共に活き共に榮ゆることを悅びとする本性が具はつて居るので、此の本性に就ては前の數章に於て種々の方面から之を說明した。

然るに人の心は空や土の如くに單純なものでなく、果てもなく複雜になつて行くものであるから、動もすれば小い利害得失の打算にのみ專にして、共に活き共に榮ゆべきその本性を忘れがちになるのである。しかし如何に狹い版圖に囚はれて居る人でも、その心の底には斯る囚はれを脫したいといふ要求が絕えず動いて居る。希臘のプラトーンが此の心持を『愛』といふことを以て說明したのは非常に面白い。プラトーンの說によれば、

プラトーンの愛の說

吾等は此の地上に住んで、限りある生活をして居るけれども、吾等の心は限りなき理想の世界に惹かれて居る。吾等は小い利害得失の絡みついた中で毎日を送つて居ながら、心の底には此中を脱出したいといふ望みがいつも動いて居る。それ故に何か美しいものに對する時には、必ず愛情が起るのである。その美しさを認めて、心に悅びを感ずる時には、利害得失の關係を全く忘れて居る。これが愛の特色である。吾等は愛することによつてのみ此の地上の凡ての囚はれを脱することが出來るのである。美しいものには樣々なる種類がある。色の美しいもの、形の美しいもの、聲の美しいもの、或は心の美しさ、行ひの美しさ等數ふるにたへぬ程ある。隨て吾等の心に動く愛情の種類も限りなくある。しかし苟くも愛するといふ以上は利害得失を離れて居る。此處に愛といふものゝ特色がある。その程度の差はあつても、凡ての愛は皆兄弟である。

哲人の種々

プラトーンは斯く愛の特色を明にして、最高の愛は眞理に對する愛であるといひ、此の最高の愛に惹かれて不斷の努力をする者が卽ち哲人であるといつた。眞に彼の言の如く、利害得失の囚はれを離れて努力するものは哲人である。斯る努力によつて人生に進歩がある。斯る哲人によつて人生が明るくなるのである。書物を讀んだり、靜かに冥想に耽つたりして居る者のみが哲人なのではない。田畝に立つて鍬を手にする人、濱邊に立つて網を引く人、店頭に在つて算盤を彈く人、如何なる業に從事する人でも其の業に一三昧になつて、人が見て居るか居ないか、直ちに報酬が與へられるか與へられぬかといふやうな事を忘れて居る時は、何れも哲人となつて居るのである。斯ういふ心が一時間續けば一時間だけの哲人である。斯ういふ心が刹那にして消えても、その刹那だけは哲人である。斯ういふ心をもつて居る時には、足に土を踏んで居ながら土を離れて居るのである。

世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し。

と法華經にいつてある通りである。蓮はその根を汚い泥の中に托して居るが、その花は清く麗しく水の上に咲いて、その放つ匂ひによつて四邊を清めて居る。それと同じ心をもつ人は世間の煩はしい爭ひや惱みの中から脱出して居るのである。卽ち此人は斯ういふ心の動いて居る間だけでも解脱が出來て居るのである。若し斯ういふ心が永く續き得るならば、眞に解脱し得た人といふべきである。

斯ういふ心を育てゝ大きくして行くことが、人々に取つて何よりも大切な仕事なのである。此の大切なことを忽且にして置いて、或は禍を天に祈り、或は神の加護によつて生涯を安樂に過すことを望むのは誤りである。狹い小い室の窓をしめて、薄暗い中に坐つて居て、何か美しいものが見たいと望むは愚である。いかなる美しい物でも此の薄暗い中へ持込まれるとその美しさを失つてしまふのである。早く窓を大きく明けて、大空の光りを取り入れなければならぬ。窓を明けると、狹い小い室と大空とが續いてしまふのである。明るい光りが室の中へ一杯に入つて來ると、室の中の凡ての物が皆照されるのである。吾等の心の窓をあけて、大空の光りを取り入れる事を敎へるのが眞の宗敎である。彼の大なる力（之を神といふ人もある・之を天と名くる人もあるが）に照されて、吾等の心が明るくなり、吾等の具有する貴い本性が次第に伸びて行く悅びこそは、いつ迄も渝らぬ眞の悅びである。自ら斯る悅びを感ずると共に、凡ての人に此の悅びを願たんとして努力したる哲人聖者の名は、その貴い敎へと共に永く史上を照して居る。

第十八章　意義ある存在

小いものにも大なる力が通へば、小いものでは無くなるのである。西行法師の月の歌には殊にすぐれたものが多いが、その中の一首に

露に宿る月

わづかなる庭の小草の白つゆをもとめて宿る秋のよの月

といふのがある。大海の水も水である、庭の草に置く小い露もまた水である。大空の月が水にその影を宿す時には、海の水と草の葉末の露とに隔ては置かぬのである。一滴の露はいふにも足らぬものであるが、彼の月の影を宿せば宛ら珠の如くに輝く。その一滴の中にも澄み渡つたる秋の氣象を看取することは出來る。凡そ世の中に存在するものに全く無意味なものはない。何れのものにも大空の果てもない光りが宿つて居るのである。何れのものも大なる宇宙の莊觀を形作るところの一部分の働きをして居るのである。之を自覺するものは、自身の存在の無意義でないことを知る。之を自覺せぬものは、唯だ小い利害得失の打算のみに囚はれて忙しく生涯を過ぐるのみである。

水の循環

先頃のことであつたが、余の家の末の兒が友達を連れて來て、庭の片隅に小い池を掘つた。池と名をつける程のものでもないが、それでも少しばかりの水を湛へて居る。余はそれを眺めながら、此の少しばかりの水が如何なる働きをするかを考へて見た。強い日の光りが此の池の上を照すと、池の水は蒸發して高く空へ騰つて行く。さうして他の池や河から蒸發して來た水と一緒になつて雲を作る。その雲はやがて雨となつて又地上に注ぐ。その空中を通りぬけるにもたゞ通りぬけるのでなく、空中のさまゞ〳〵なる汚れを洗ひながら地上に落ちる。さうして地中に入つて草の種や木の實を養つて芽を出させ、又日の光りに照されて蒸發し、又空高く騰つて雲

となり雨となる。斯く此の僅かな水は限りなく天地の間を循環して、さまざまの働きをして居るのである。しかし此の水は自身の力のみで斯ういふ働きをするのではない。若し此水が地の上に湛へられず、日の光りに照されず、曠々としたる空中を通り過ぐることが出來ぬならば、斯る働きは出來ぬであらう。されば此水にして若し靈があるならば、自己の働きを誇り示すの念を生ぜず、寧しろ斯る多くの働きを爲し得たことを天地に對して感謝するであらう。それは彼の庭の小草の白露が月影の來り宿つたのに對して懷くべき感謝の念と同じものでなければならぬ。

人生のことも亦た此の如くである。余は日本海大海戰の記念日にあふ毎に、此國の運命を決すべき此の未曾有の大海戰に際して、能くその大任を果したる東郷提督の忠誠と勇氣とに對して、吾等はいつ迄も感謝しなければならぬことを感ずるのであるが、なほ實際此の大海戰に參加したる人々

提督と飯炊き

の經驗談を多く聽いて見ると、獨り東郷提督のみならず、當時各種の任務に從事して居た人々の忠誠と勇氣とに對して同樣に感謝しなければならぬことを痛感する。余は又その大海戰が五月二十七日の曉から翌二十八日の午前中續いたことを知つて、飯炊きの功勞といふことを考へた。東郷提督をはじめ吾が軍の勇士は何れも飯を食べて働いたのである。その飯は大將や中將が自分で炊いたのではない、身分もなく位もなく、名も知られぬ水兵が炊いた飯である。若しあの時に飯を炊く水兵がその責任を果さなかつたら、結果はどうなつたであらう。二十七日の朝飯もない晝飯もない晩飯もない、二十八日になつても未だ飯がないといふ有樣で、大將も中將も腹が空いて眼が昏んで、敵の船も味方の船も見分けがつかぬといふ事であつたら、恐らく日本海の海戰は日本の負けとなつたであらう。斯う考へて見ると吾等は能くその責任を果して、一軍の勇士をして少しも飢を感せしめ

互ひの感謝

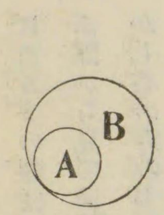
す、立派にあの大功を樹てさせたる飯炊きの水兵に對しても大に感謝しなければならぬと思ふのである。

東郷提督は立派に吾が艦隊を統率することによつて日本國を救つた。飯炊きの水兵は正直に飯を炊くことによつて日本國を救つた。東郷提督がなければ、あの立派なる勝利は得られなかつたであらうが、飯炊きが飯を炊かぬといふことがあつても、矢張りあの勝利は得られなかつたのである。しかしながら此の飯炊きの水兵も日本の艦隊に屬して居たればこそ、飯を炊くことによつて國を救ふといふ大きな手柄を立て得られたのである。若し露國の艦隊に屬して居たなら、いかに懸命に働いても結局は慘敗して、或は生命を失ふことにもなつたであらう。されば彼の水兵もまた能く其の責任を果して大勝利の光榮を分ち得たに就て深く滿足し又感謝した事であらう。これは日本海の大海戰といふ一の出來事に關しての觀察であるが、

超越の二種

更に汎く人類の進歩とか文化の發展とかいふ大きな版圖のことに就て考へて見ても、此と同じことが感ぜられなければならぬ。顯はれたるもの隱れたるもの、その力に大小はあつても、全く無意義のものとては無く、多くの人と多くの物と相依つて、此の進歩を來し此の發展を遂げ來つたのである。

斯く一々の人と物との貴きを感ずると共に、此の人と物とを包む所の絶對の力の尊嚴を吾等は深く感じなければならぬ。吾等がその尊嚴を感ずるのは彼のイスラエルの人民が神に對して感じたり、支那の古代の人々が天に對して感じたのと同じ性質のものではない。今此の圖に於て右の方にあるBの圏はAの圏より離れて上の方にある。さればBはAより超越して居るといへるのである。而して左の方



にあるBの圏はAの圏をその中に包んで居る。此のBはAに限られぬといふ點から見て、右の方のBを同じくAより超越して居るといつても宜い。しかし右の方のBの如くに遠くAと離れて居るのではない。Aを其中に包んで、而もAに限られぬのである。これが眞に貴いのである。高く離れて居るものゝ貴いといふは冷かなる貴さである。たゞ仰いで及ぶべからざることを知るのみの貴さである。然るに自ら其中に包容せられて居て、而も其の力の限りなく大なる事を感じた時の貴さは、懷しさに伴ふ貴さである。子の親に對する、臣の君に對する、皆斯る貴さを感ずるのでなければならぬ。

例へば吾が皇室と吾等との關係の如きは正しくこれである。或る時代には皇室を『雲の上』と稱へて、たゞ崇め尊ぶことのみが主となつだけれども、それは明治天皇より明治元年三月に下し賜はりたる宸翰に

吾が國の君臣

今日朝廷の尊重は古に倍せしが如くにて朝威は倍衰へ、上下相離るゝ事霄壤の如し。かゝる形勢にて何ぞ以て天下に君臨せんや。……往昔列祖萬機を親らし……朝廷の政總て簡易にして如此尊重ならざるゆへ君臣相親しみて上下相愛し德澤天下に洽く國威海外に輝きしなり。

と仰せられてある通り、吾が本來の君臣關係と遠ざかつた時の事である。本來の關係から申せば明治天皇が『朕が親愛する所の臣民は卽ち朕が祖宗の愛撫慈育したまひし所の臣民なるを念ひ』と憲法發布の際に仰せられたる如く、大正天皇が『義は卽ち君臣にして情は猶ほ父子の如く』と御卽位式に際して仰せられたる如きものであつた。齊明天皇の時朝鮮の問題よりして唐と戰端を搆へた際には天皇親ら筑紫の朝倉の宮へ行幸になつたのであるが、その時天皇に供奉して朝倉の宮に在らせられた中大兄皇子（後に天智天皇）の御歌に、

朝倉の宮

朝倉や木の丸殿に吾が居れば名乗りをしつゝ行くは誰が子ぞ

といふのがある。簡單質素なる假御所の前を行き過ぎる者が、一々丁寧に御挨拶をして通つて行くのを御所の中から御覽になつて、彼は誰が家の子か、誠にしほらしい姿であると、左右の者に御尋ねになるさまがよく一首の上に現はれて居る。其の靄然たる情誼は眞に吾が國に於ける君臣の間にのみ存するもので、此上もなく貴く思はるゝのである。

斯く上の御心は下に徹し、下の誠心は上に通じて居たればこそ、明治天皇が『我が神聖なる祖宗の威德と並に臣民の忠實勇武にして國を愛し公に殉ひ以て此の光輝ある國史の成跡を貽したるなり』と仰せられたやうに、國史の上を照す所の幾多の美談も生れ出たわけである。殊に此の唐との戰爭に於て、國を愛し公に殉ふ模範的の行ひが微賤の者に見られたのは注目すべきことである。唐との戰が終了せぬうちに齊明天皇は崩御になり、續

大伴部博麻

いて天智天皇の御代となつて間もなく、朝鮮の白村江に於て開戰し、吾が軍は散々に打負けたのであるが、此時筑紫から出た軍丁に大伴部博麻といふ者があつた。彼は唐の軍に捕虜となり長安の都へ連れて行かれた。長安には土師連富抒等四人の者が國交斷絶と共に日本へ歸る事も出來ず、幽囚の身となつて居た。博麻は折々此等の人達と逢つては慰めあつて居たが、その内に唐が新に大軍を起して日本を討つ計畫を立てたといふ噂を聞いた。早く此事を本國へ申送つて、國防を完全にするやうにしたいのであるが、それには如何なる方法を取つたら宜いかと、五人が頭を集めて協議した。それで結局は金次第といふことになつた。金さへあれば、富抒等は賄賂を官人に贈つて幽囚の中より脱し、姿をかへて日本へ歸る事も出來る。しかし差當り金の工面はどうしてもつかぬのである。そこで博麻は彼等四人に向つて『自分は至つて微賤の者であるから、たとへ日本へ歸つても何

の役にも立たぬであらう。貴君達は身分のある人であるから、日本へ歸りさへすれば國防上に就て如何樣なる献策も出來るのである。就ては自分が身を賣つて奴隷となり、その金を一切の費用に差出さうったとへ自分は一生を他國で送つても、聊か國恩に報ずることが出來れば本懷である』といつた。

四人の者は涙を流して博麻に感謝した。博麻は自ら奴隷となつて、その金を四人の者に與へた。萬事は豫定の如く行はれて富抒等は無事に日本へ歸り、唐の大軍を興して日本を襲ふといふ計畫を噂に聞いた通り天智天皇の朝廷に報告した。之によつて天皇の勅命が下つて筑紫に水城が設けられた。尤も唐の遠征は中止となり、其後幾くもなく吾國との間に和議が結ばれて、吾國からも續々と留學生や留學僧を唐へ送るやうになつたので、水城は全く無用のものになつたやうであつたが、其後六百餘年を經て鎌倉時

彼の孤忠は酬あられた

代に至り蒙古が入寇した時に防戰上相應な役に立つたといふことである。それは後のことであるが彼の博麻は獨り寂しく唐に殘り奴隷となつて勞役を續けて居た。彼は微賤の者ながらに國恩に報じ得たことに滿足するといふものゝ、まことに佗しい氣の毒な身の上であつた。斯くして唐に在ること三十年に及び年も老い身も衰へたので、彼は奴隷を免されて久々で故郷へ歸つて來た。時に持統天皇四年のことである。彼は餘生を寂しくその故郷に送つて居たが、その壯烈の事蹟は筑紫國司の知る所となり、國司よりして一切を朝廷へ奏聞したので、特に持統天皇より至て御手厚き恩賞があつて、その上に漢文で二百七十餘字の懇篤なる詔を賜はつた。その詔の中には以上の事實を漏れなく記されて其末に『朕その朝を尊び國を愛し己を賣つて忠を顯せることを嘉す』といふ語がある。日本の國史上に『愛國』といふ語の見えたのは抑もこれが始めである。天皇より親しく無位無官の

愛國といふ語の起り

一老翁に詔を賜はつたといふは空前絶後の事で、博麻が三十年の孤忠は之れによつて充分に酬ゐられたといふべきである。彼は學問も教育もない一賤民であるけれども、國恩に報せんが爲には身を奴隷に賣つて少しも悔ゆる所が無かつた。又此の健氣なる事蹟が上聞に達した時には、天皇より親しく詔を賜はつて之を嘉賞せられた。これこそは眞に吾國に於ける君臣の關係の世界に比類なきものであることを證するものである。

彼の朝倉の木の丸殿より往來の人を見そなはして『名乘りをしつゝ行くは誰が子ぞ』と仰せられた有難い大御心が本となつて、此の如き『光輝ある國史の成蹟』も顯はれたものと思はれる。斯る大御心は御歷代を通じて全く同一であつたと拜察せられる。遠き昔の事をいへば神武天皇が大和を御討平にならんとした時に、長髓彥の軍のために苦められ、皇兄五瀨命の流矢に中つて薨ぜられたのをはじめとして、味方の勇士に多くの死傷があつた。天皇は深く之を悲みたまひ、自ら衆の先に立ち勇を鼓して進まれながら高らかに御歌を歌はれて多勢の者を御勵ましになつた。『我は忘れず、討ちてしやまむ』といふは其の結句である。卽ち衆人の忠死に報ずべく奮戰して勝利を制せんとの御心を歌はせられたのである。其後大和を討平せられて都を橿原の地に定めたまふに當り、下されたる詔の中には、

民を本とするの聖意

夫れ大人の制を立つる、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利あらば何ぞ聖造を妨げん。

とある。此の如き大御心によつて民を治めたまふが故に『寶祚の隆なること天壤と共に窮まり無からん』といふことを誰も疑はぬのである。天皇が此國を御統治になる事を古語では『しろしめす』といふ。武力を以て衆を壓服して治めるとか、智力を以て衆を懷げて治めるとかいふのとは全くちがふのである。さういふ類の治め方は古語に『うしはく』といつてある。

此國をしろしめす天皇

例へば甲州に武田氏あり越後に上杉氏ありといふ類のは皆それ〴〵の地方をうしはく者である。獨り天皇は此國をしろしめすのである。それは統治せらるゝ土地の廣狹とか、人民の多少とかによつて立てられたる區別ではない。全く根本的にその性質がちがふのである。しろしめすとは能く民の心を知つて御治めになることである。『子を知ること親に如かず』といふ古語がある。親は大なる愛を以て其子を包んで居るものであるから、其子に就て誰よりもよく知つて居るのである。それも愚な親であれば其子の愛に溺れて、却て其子の性質をも氣風をも知らずに過ることが多いけれども、其子を愛して而もその愛に溺れぬほどの賢い親であれば、誰よりも其子のことを最もよく知つて居るのである。吾が皇室も正しくその如く、よく一視同仁以て吾等に臨みたまひ、吾等を盡く包容し盡く愛撫したまひ、吾等の心の底までを能く知ろしめして、御統治になるのである。武力とか智力とかによつて治めたものとは根本的にちがふのである。それ故に臣民も常に渝らず忠誠を勵むのであつて、國恩に報じ皇恩に報ぜんとの念に於て貴賤上下の隔ては全くない。

眞の貴きもの、實例

斯く吾國の君臣關係に就て長々と語つたのは、眞の『貴きもの』の活きた實例を示さんが爲である。吾等は父祖以來の日本人であつて、日本に於ける君臣の關係に就ては熟知して居るのである。眞の貴さを吾等は父祖以來よく知つて居るのである。理論として如何なる貴さが眞の貴さであるかを辨へて居るのではない、實生活の上に於て眞の貴さを味ひ來つて居るのである。國に盛衰があり時に變遷はあるけれども、吾等の凡てが此事を忘れぬ限り、此國はたとへ如何なる困難の中に陷つても必ず之を凌いで行くことが出來る。是のみは吾等が世界の人に向つて、永く誇ることの出來るものである。偏狹なる自尊心は更に價値のないものである。吾等は世界の

負け惜みはつまらぬ

多くの國々と比べて見て、自己の及ばぬ所足らぬ所をよく知らなければならぬ。たゞ彼等の缺點を數へあげて虛勢を張ることは深く愼まなければならぬのである。吾等は最近數十年の間、彼等と交際を續けることによつて實に多くの事を學んだ。此の恩惠を吾等は決して忘れてはならぬ。たとへ彼等の態度に於て幾多の橫暴のことがあり、吾等東洋人として憤慨しなければならぬ點が少からずあつたとしても、其等の事の爲に吾等の受けたる恩惠を忘れてしまつてはならぬのである。又吾等は今後に於ても、多くの事を彼等よりして學ばなければならぬものである。吾等は常に自ら反省して自己に足らぬ所の多いことを知り、飽くまで謙讓の態度を以て益を世界の國々に請ふべきである。それと同時に世界の國々の人が、未だ國民としての實生活の上に味ひ得なかつた眞の貴さを味ひ得たる、此の悅びを永く心に銘し、協力一致して此の比類なき國民性の發揮に努め、將來何れかの日に於て（今日の吾等では殘念ながらダメであるから大に奮發して）『眞の貴い力の中に於て養はれたる幸福なる國民』の實例を世界に示すことが出來るならば、彼等に對する立派な恩返しにもなるであらう。

斯く吾國の君臣關係を活きたる例として知るべきが如く、眞の貴いものは超越的であつて同時に包容の力を具ふるものでなければならぬ。卽ち前の圖に於ける左方のBのAに於ける關係でなければならぬのである。前の章に擧げたるイスラエル人の神や古代支那人の認めたる天は、其の右方のBをAよりして仰ぎ見たる狀態のものであつた。されば測り知るべからざる力であると共に、恐るべき力であつた。斯る力の下に生きて居ると思ふものは何となくオド〳〵として落着かぬ氣分をもつて居る。舊約全書の出埃及記に、神がシナイ山上に於てモーセに告げられたる語がある。その中には、

汝我が面の前に我の外何者をも神とすべからず。汝自己のために何の偶像をも彫むべからず。又上は天にある者下は地にある者、ならびに地の下の水の中にある者の何の形狀をも作るべからず、之を拜むべからず、之に事ふべからず。我エホバ汝の神は嫉む神なれば、我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代に及ぼし、我を愛し我が誡命を守る者には恩惠を施して千代に至るなり。

とある、これは前にもいつた所謂十戒の出處であるが、實に戰慄すべきを覺ゆるほどの嚴厲なる語ではないか。

支那の古代に於ても多くの賢人は天が上に在つて吾等を監視して居るといふ考へを本として、日々の行ひを愼むべきことを敎へたもので、その例は前にも屢々引用した。殊に國王の如き責任ある地位に在る人は最も深く戒愼すべきであるといふので、例へば伊尹は『惟れ天親む無し、克く敬するに惟れ親む。鬼神常に享る無し、克く誠なるに享く』といつた。祖巳は『惟れ天下民を監し、その義を典る。年を降す永きあり永からざるあり。天の民を天するに非ず、民の命を中絶するなり』といつた。斯く天を畏敬することを說いた語は詩書の中に夥しくあるが、イスラエル人の神はそれよりも一層畏るべきものと考へられたやうである。神の罰を恐れて行ひを愼むといふは善い事には違ひないが、是のみでは何事をも消極的に考へすぎて、外に發展し膨脹する力を缺くの弊に陷るを免れぬ。誰か詠み人は忘れたが

消極的になりすぎる

あまりにも疵あらせじと思ふより玉は小くもなりにけるかな

といふ歌があつた。固より明玉には毛ほどの疵も無いことが望ましいのではあるが、唯だ疵の無からんことのみを求めて、切角の玉を磨きつ摺りつして恐ろしく小くしてしまふのは詰らぬことである。唯だ過失がないとい

ふだけでは決して生きがひのある一生とはいはれぬ。過失を小くすることに努むるといふ消極的一面の外に、一面積極的の努力がなければならぬ。卽ち吾等の具有する貴い本性を大に發揮して行かうといふための努力がなければならぬ。(前章、懺悔に就て說いた所を參照) 小兒を敎育するのでも、『勿れ』と『べからず』のみで抑へつける時には、日蔭の草のやうないぢけた者が出來上るのである。神の罰を畏れて所謂ビク〳〵者で每日を送る國民に大なる活動の出來やう筈はない。

ダビデの歌

勿論イスラエル人だとて神を畏れてのみ居たのではない。神を宇宙の創造者として崇め、神の貴い業を讃歎し感謝する思想も固より發達して居たのである。例へば舊約全書の『詩篇』中にあるダビデの歌に、

もろ〳〵の天は神の榮光をあらはし、穹蒼はその手のわざを示す。此の日ことばを彼の日に傳へ、此の夜知識を彼の夜におくる。語らず言はずその聲聞えざるに、その響きは全地にあまねく、そのことばは地のはてに迄及ぶ。……エホバの法は全くして靈魂をいきかへらしめ、エホバの證詞はかたくして愚なる者を智からしむ。エホバの訓諭は直くして心をよろこばしめ、エホバの誡命は淨くして眼を明ならしむ。……わが口の言、わが心の思念なんぢの前に悅ばるゝことを得しめたまへ。

ソロモンの箴言

とあるが如きは如何にも莊大なる思想で、讀む者は誰も晴れ〴〵した氣分になる。しかし大體に於て神の愛に賴り、神の惠みに懷き、此の天地の間を吾が安宅として、安らかな心を以て每日を送るといふよりも、神の監視を恐れるといふ色彩の方が强かつたことは爭はれぬ。さればソロモンの箴言の劈頭に、

エホバを畏るゝは知識の本なり。愚なる者は智慧と訓誨とを輕んず。

とあり、なほ又

義人は地にながらへ居り、完全者は地に止らん。されど惡者は地より亡ぼされ、悖逆者は地より拔去らるべし。

といひ、或は

エホバの呪詛は惡者の家にあり、されど義者の室は彼に惠まる。彼は嘲笑者をあざけり、謙る者に恩惠を與へたまふ。

といふが如き語は夥しくある。又例へば『エレミヤ記』の中に、エレミヤが多くの人々にエルサレムの亡びたることを說明して、

エホバは汝等の惡きわざの爲、汝等の憎むべき行ひのため、再び忍ぶことをえせざりき。この故に汝等の地は今日の如く荒地となり、驚異となり呪詛となり、住む人なき地となれり。

といへる如きも、彼等が如何に神を監視者として恐れて居たかを證するものであらう。

發展の出來ぬイスラエル人

昔の希臘人が神を神聖にして汚れなき者と思はず、たゞ人よりも多くの力をもつ者と考へて、之に福を祈つたのに比べれば、イスラエル人の神に對する觀念は遙かに立勝つて居るといへやう。しかし彼等イスラエル人が希臘人の如くに目覺しい發展を爲し得ずして終つたのは、一にはその四圍の事情にもよるのであるが、又一には彼等の固有の思想が彼等に累したものと見なければならぬ。祖先の罪によつて樂園を追はれたといふ傳說にはどうしても遠い昔を黃金時代と見て、今の自分達の境界をはかなむといふ思想の伴ふことを免れぬ。之を希臘人が『自分達の努力一つで此の地上に黃金時代が建設せらるゝに違ひない』といふ意氣込みで勵ましあつたのに比べると餘程のちがひがある。所謂『ソロモンの榮華』も至て小規模のものであつて、彼等は希臘人又は羅馬人の如く地中海の周圍を壓すべき大なる勢力を作ることが出來ずして終つた。

耶蘇の識見

斯るイスラエル人の中から出て、耶蘇は流石に其の識見に於て群を脱いて居た。耶蘇は神を以て吾等の監視者と爲し、その刑罰を恐れて行ひを慎みビク〳〵者で世を送る者の蒙を啓き、神が凡ての生命ある者の父なることを明かに敎へた。彼が世の人を審判せんが爲に來りしにあらず、世の人を救はんが爲に來りし者であるといつたのは、よく其の志の存する所を示して居る。彼もまた昔の豫言者の如くに『爾等悔改めずば皆同じく亡さるべし』といつたけれども、その意味には非常なる差があつた。彼は人々が衣食にのみ思ひ煩ふの愚を戒めて、

爾等の父は是等の物の爾等に無くて叶はぬ事を知る。たゞ神の國を求めよ、さらば是等の物は爾等に加へらるべし。小き群よ、懼るゝ勿れ、爾等の父は喜びて國を爾等に與へ給はん。……盡きざる財寶を天に備へよ、其處は盜賊も近よらず蠹も壞はざるなり。爾等の財寶の在るところには爾等の心も亦そこに在るべし。

といつた。又自己の此世の來れる目的を述べて

我を見るは我を遣はしゝ者を見るなり。我は光にして世に來れり。凡て我を信ずる者をして暗きに居らざらしめん爲なり。

といつた。卽ち彼等をして神を父として愛し且信じ、神によつて護られて幸福なる世を送らしめんことを目的として彼等を敎へたのである。人々は神の罰を恐れ神の賞を求むるが爲に神を信ずるのでなく、子の父に對すると同樣なる誠を以て神を信じ、また神に賴るべきである。

又耶蘇は人々が昔その祖先の追はれたる樂園へ再び歸らんことを夢みるの愚を諭し、人々の努力次第でその樂園を直ちに此地上に見るを得べきことを敎へた。パリサイの人が『神の國は何れの時に來るのか』と問へるに對して、耶蘇の答へは

神の國は顯はれて來るものにあらず。此に視よ、かしこに視よと人のいふべき者にも非ず。夫れ神の國は爾等の裏に在り。

神の愛

といふのであつた。耶蘇は人々にその敵をも愛せよと敎へ、それは神の愛を範とするものであると說き示した。

己を愛する者を愛するは何の賞賜あらんや。惡人にても己を愛する者は愛するなり。……爾等敵を愛し又善をなし、何をも望まずして貸與へよ。さらば其賞賜は大なり、且至上者の子とならん。夫れ上者は恩を忘るゝ者及び不善者にまで慈愛を施せばなり。

とある。斯く人々が神の心を以てその心として相愛し相扶くるならば、いかなる發展をも遂げ得べきである。弟子の一人が彼に向つて『主よ、先づ往きて父を葬ることを我にゆるせ』といへるに對して、耶蘇が

我に從へ、死したる者をして其の死し者を葬らせよ。

神我等と俱にあり

といつたのは、決して子として父の恩を輕んじても宜いといふ意味ではない、その敎へが眞に生きんことを望む者の爲の敎へであることを明にしたのである。眞によく生きて行くことが卽ち父の恩に報ずる道ともなるのである。

耶蘇の生れる前に、神の使が彼の父ヨセフの夢に現はれ『此事は豫言者によりて主のいひ給ひし言に、處女はらみて子を生まん、其名をインマヌエルと稱ふべしとあるに應はせん爲なり。其名をとけば、神我等と俱に在りとの義なり』といつたと言ひ傳へられて居るが、實に耶蘇は吾等が爲に神と共にあるべき道を示した者である。前の圖にかいた右方のBに似たる神は、耶蘇によつて初めて左方のBの如く說明し解釋せられたのである。斯く人々が共に大なる神の力の中に包容せらるゝことを信じ、共に喜んでその努力を續くるならば、如何なる事でも出來る筈である。使徒パウ

ロは其の努力の意味を說いて、

多くの人の感謝によつて神の榮えを顯はさんが爲なり。

といひ、なほ之が爲に如何なる艱苦をも敢て辭せざる意氣を述べて、

我等が願る所は見ゆる所の者に非ず、見えざる所のものなり。そは見ゆる所の者は暫時にして見えざる所の者は永遠なればなり。

といつたが、耶蘇の敎へが歐洲へ傳はつて後千數百年來、多くの人は斯る意氣精神を以て其事に當り、人生の進步にそれ〴〵の貢獻をして居るのである。

人に對する愛

神は凡ての者の父であることを知り、神は無限の愛を以て凡ての者に臨むことを知るならば、勿論人々は互ひに相愛し相扶くべきものなることを知るべきである。パリサイの一人の敎法師が耶蘇を試みんが爲に『師よ、律法のうち何れの誡か大なる』と問うたのに對し、耶蘇の與へた答へは、

心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし。これ第一にして大なる誡なり。第二も亦これに同じ、己の如く爾の隣を愛すべし。凡ての律法と豫言者は此二の誡に因れり。

といふのであつた。愛はプラトーンのいつた通り、(前章參照)利害得失を一切離れて美しい物に吾が心を惹かるゝより起るのであるが、その美しいといふのに無限の種類がある。若し何物をも美しく見ることが出來るならば、何物をも愛することが出來るであらう。蕪村の句に

かげろふや名も知らぬ蟲の白き飛ぶ

といふのがある。白い蟲を一匹見たところで少しも美しい事はない。しかし陽炎のユラ〳〵ともゆる春の野に白い蟲の飛びかふ樣はいかにも長閑で美しい。その小い蟲の羽たゝきにも春のけしきは流れて見えるのである。

又白雄の句に

しぐるゝや鹿に物いふ油つぎ

といふのがある、多分は奈良あたりの景色であらう。燈籠の油をついで歩く老爺の姿はあまり風流なものではない。しかし之を時雨ふる中に立つ鹿の姿と配して見ると、そのまゝに畫である。斯く吾等は蕪村や白雄の句を通して、はかない蟲をも、見すぼらしい老爺をも美しく見ることが出來るのである。吾等の人生觀が若し變るならば、きのふまで愛し得なかつた者をも愛し得るに到るであらう。

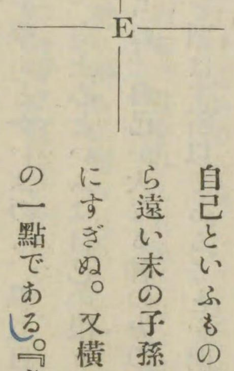
自己を愛する心

先づ吾等は自己を愛することから考へて見なければならぬ。自己の身を愛することは誰人も敎へられずして知る所で、殆んど本能ともいふべきものであるが、その自己なる者の考へ方次第で、愛し方もちがつて來なければならぬ。自己を愛せず、自己の生存に或る滿足を感ずることがなければ何の活動も出來やうわけは無い。

然るに多くの人は自己を愛するよりして種々なる罪を作るので、『利己的の行爲』を戒めぬ宗敎や道德說は殆んど無いのである。しかし利己心といふは小なる自己に囚はれて、大なる自己を忘れた所から起るものであることは、前々から繰返して說いた通りである。人々が修養に力を用ゐるとか、聖賢を學ぶとかいふのも、畢竟自己を愛する念より出るものと見るべきである。向上心といふは自己の限りなく進步するに對して滿足を感ずる心に外ならぬ。自己が大なる神の力の中に活きてゐること、自己の努力が神の光榮を顯はす所以であることを明かに知るならば、眞に自己の愛すべきを覺えなければならぬのである。自己を愛することは下等動物でも知つて居るが、其の愛の至れるに及んでは全く動物的の性質を離れて居る。宛も土に根をもつ草の花が美しく咲く時に、その花は空の光りを浴び、少しも土の匂ひをもたぬやうなものであらう。

自己は縱横交叉線の一點

吾等は吾等自身の重んずべく貴むべきを知ると共に、又他の凡ての人の重んずべく貴むべきを知らなければならぬ。吾等は遠い昔から共に生き共に住み、共に育つて來て居るのであつて、周圍の人を離れて自己といふものを考へる事は出來ぬのである。此圖に於て縱横の線の交叉點にEがある。



自己といふものが卽ちこれであつて、縱には遠い祖先から遠い末の子孫に至るまで續いたる永い生命の中の一點にすぎぬ。又横には周圍の凡ての人に續いたる生命の中の一點である。『心に問うて見て』とか『内に顧みて疚しくなければ』とかいふが、その心にとか内にとかいふものゝ内容は久しい間に進化し發展して以て今日に及んだものと見なければならぬ。吾等は正邪を別ち善惡を別ち、其他種々のことを別つのであるが、その別つといふ作用の中には吾等の祖先以來發達し來つたる種々なる風俗習慣、種々なる

カントの無上命法

教へ、種々なる信仰の力等が織り込まれて居る。斯く互ひに影響を與へあひ、感化を及ぼしあつて數百千年を經過し來つたことは、吾等が皆共に人として相通ずる所の本性をもつて居る事を證するものである。前にも引いた中庸の語に『能く其性を盡せば則ち能く人の性を盡す』とあるは卽ちこの事である。其性とは自己の性である、よく自己の性を知るならば、人と相通ずる所の性を知り得べきである。卽ち凡ての人が同じ原理の下に治められ、共に生き共に住んで以て今日に及んだことに思ひ到るべき故に、中庸にはまた『人を知らんことを思はゞ以て天を知らざる可からず』ともいつてあるのである。

カントの有名なる無上命法の說は、吾等の意志の絕對性を認むる所より出發して居るのである。カントの說によれば、意志の命ずる所は絕對である。意志が斯くせよと命ずる時は必ず之に從はなければならぬ、意志が斯

くすべからずと禁ずる時は必ず之を止めなければならぬ。利害得失とか快不快とかの關係によつて之を左右することを許さぬのである。若し吾等が外から與へられたる道德法に隨ひ、その善と定むる所を行ひ、その惡と定むる所を避くるならば、これは他律的道德にすぎぬ。然るに意志の命ずる所によつて行ふことは自律的道德である。自律的道德は自己の心の底にシツカリとしたる根柢をもつものであるから、外部の事情境遇の變化によつて動搖することの無いものである。しかし自ら善と信ずる所を行ふといふだけであれば、その所謂意志の命令なるものは畢竟個人的の信條にすぎぬので、未だ以て凡ての人の共に遵奉すべき道德的法則と爲すに足らぬものである。『各人の心にそれ〴〵の尺度がある』といつた昔の希臘詭辨派の主張と多く擇む所なきものともいへるであらう。

されぱカントは『汝の心の信條が凡ての人に通ずる法則となり得るやう

に行へ』といつたのである。若しそれが吾が現在の立場に於てのみ行ひ得べきことであつて、他の人と立場を換へて見ても行ひ得べきことでないならば、それは必ず意志の命令ではないのである。意志の命令が絶對的であるといふのは、それが唯だ吾人の意志でないからである。それは宇宙の全體を支配する大なる意志（カントは之を呼んで神といふ）の吾が心に現はれたものであるからである。意志の聲は卽ち吾が心の中の神の聲なのである。それ故にこそ絶對の價値があるのである。自律的といふのは小き自己によつて律せらるゝの謂ではない、人として萬人に通ずる自己の本性の律する所なのである。若し今自分が親として吾が子に望む所のことを、自分の親が自分に對して望んだとしたら如何であるか。自分は子としてそれを無理と思はぬであらうか。若しそれが子としての自分に無理と思はるゝやうな事ならば、之を自分の子に對して望むことは出來ぬ筈である。之を望

む事は吾が意志の命ずる所ではないのである。吾が意志の如く他の人の意志も貴い。互ひに意志を尊重しあふ事は、實に互ひの意志に現はるゝ所の大なる意志を尊重する所以である。斯る意志を有するものを名けて人格といふのである。互ひに意志を尊重しあふといふも、互ひに人格を重んじあふといふも要するに同じ意味である。孔子が仲弓の仁を問へるに對して、門を出ては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭に承ふるが如くす。己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。邦に在つても怨無く、家に在つても怨無からん。

といつたのは能く此意と一致せるものである。

易の中には『同聲相應じ同氣相求む、水は濕へるに流れ、火は燥けるに就く』といつてある。人は其の地位職業がそれ〴〵に異り、その性質氣風も亦たそれ〴〵に異るけれども、共に人として相通ずる所の性質を有する

心と心が惹きあふ

が故に、その心と心とが相惹き相求めて居るのである。獨り樂むよりも共に樂めば更に多く樂しい。獨り惱むよりも共に惱めば遙かに堪へ易い。又前にもいふ通り屢々他の人の悲みを共に悲み、他の人の惱みを共に惱むことに一種の滿足を感ずる。これ人として其心が相惹き相求むる本性を有するに基くものである。古來多くの聖賢が或は博愛を說き或は仁を說き、或は慈悲を說いたのは、人々を强いて行ひ難きを行はしめんとするのではない。その本性に具はれる所の相惹き相求むる作用を長養せしめ發達せしめんとするに外ならぬのである。人は何れも完全なものでないから其の過失を數へれば何人にも多くの過失がある。何人も嫌ふべく厭ふべき點を幾つかもつて居る。しかし涅槃經の中には、

若し彼の衆生に善として讃ず可きもの無きも、當に佛性を念じて之を讃歎すべし。

貴い本性の發露

といつてある。何人も共に大なる力の中に含まれ、大なる力によつて護られて生きて居る。而してその大なる力が各人の心に通つて居る。（之を天といひ、之を神といひ、或は之を佛といふは說く人の立場のちがひであるが）たとへ種々の行き懸りから自己の小い欲望を滿足せしめんことにのみ熱心となり、その他の事を一切忘れはてたやうになつて居るものでも、時にはその貴い本性が眼を覺すことがある。

余は先年信州の南方を漫遊して居た時に、或る村で愉快な話を聞いた。その村には街道に沿うて小河が流れて居る。その流れに接して百姓の家が立つて居る。或る家で若い女房が稚い兒に添寢をして居た。夏の事で暑苦しいので表の戸は半分明け放しになつて居た。夜の明け方に眼をさました兒が寢床から這ひ出して戸外へ出たのを母は熟睡して居て知らなかつた。這ひ出した兒は漸く彼の小河に近づいて、今一足でその流れの中へ陷らうとする。その危いところへ通り懸つた若い男があつて、覺えず『危い』と大聲をあげ、走り寄つて其兒をつかまへた。その聲に驚いて眼をさましたた彼の女房は、表へ飛び出して見ると自分の兒が危いところを助けられたのである。ところへ隣の家の女房も出て來て、共に彼の若い男の親切を感謝し、是非共立寄つて休んで行つてくれといふが、彼の男はソハ〳〵として落着かず、急いで別れを告げて去らうとする。二人の女房は是非休んで行けと袖を捉へて放さぬ。そこへ二三人の人が駈けて來て彼の男を捕へてしまつた。その男は隣の村で盜賊をして此處まで逃げて來たのであつた。彼は小兒が水に溺れんとするのを見て、自分が後から追はれて居る身であることを忘れ、覺えず大きな聲を出して、之を助けたのである。その爲に彼は逃げ損じて捕へられたから大なる損をしたわけである。しかし此處に彼の人としての本性が發露したので、まことに貴い事といはなければなら

一刹那だけの聖賢

ぬ。余は是だけの話を聞いたのみで其後の事を知らぬから、此男が此より後にどんな生活をするやうになつたか分らぬが、たとへ其前後の彼の生活が全く無意義に近いものであらうとも、少くとも此の刹那だけは生きるかひのある生き方をして居たのである。如何に淺ましい生活をして居る人でも、その毎日の一擧一動を仔細に觀察するならば、必ず此の話の中の男のやうに、利害得失の打算を忘れて何かの事のために力を盡す瞬間があるのである。それが一刹那であれば一刹那だけの聖賢、それが五分間續けば五分間だけ、十分間續けば十分間だけの聖賢である。

吾等の心は自覺せざる間に相惹き相求めて居るのであるが、若し之を自覺すれば更に悅びが增すにちがひ無い。自ら神の心と通ひあふものとして自己を愛し且重んずると共に、他の凡ての人が皆神の心と通ひあふことの出來るものであるから、之を愛し之を重んずるのである。某といふ人を愛

愛することの悅び

するのは某といふ人の人としての本性を認めて之を愛するのであるから、之に大なる悅びと滿足が伴ふ筈である。吾も彼も共に貴いものなのである。彼を愛するは卽ち彼と共通なる滿足を感ずる所以なのである。昔の武將が互ひに敵となつて鎬をけづりあひながら『敵ながらも天晴れである』と感服しあつたといふ話はよく聞くことであるが、斯る感情の動いて居る間は、勝を爭ふといふ考へを全く離れ、又勝を爭ふに伴つて生ずる所の煩悶や焦慮を超越して、敵の人としての價値を讃歎して居るので、其處に大なる滿足があり、悅びが溢れて居るのである。

眞の解放

斯く他人を愛する事によつて感ずる悅びは、吾も彼も共に大なる神の力の中に立つものなることを感ずるによつて生ずる悅びである。小き自己に囚はるゝことを忘れたる悅びである。此の悅びを感じ得る人が卽ち眞の解放されたる人である。此人は小い利害得失の鎖によつて縛られてゐた中か

ら放たれたる人なのである。俳人芭蕉は『笈の小文』の劈頭に於て過ぎ來し方の自己を回顧して、

狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦みて放擲せんことを思ひ、或時は進んで人に勝たん事を誇り、是非胸中にたゝかふて是が爲に身安からず。しばらく身を立てん事をねがへども、之が爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らん事を思へども之が爲に破られ……

といつて居るが、終に俳諧の道に安じ得て後の覺悟を說いて、

風雅に於けるもの造化にしたがひて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなく、思ふ所月にあらずといふこと無し。かたち花にあらざる時は夷狄にひとし、心月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり。

といつて居る。彼は一切の物が皆造化の大なる力の中に包まれて存することを達觀し得たる故に、いかなる物をも月と見花と見ることが出來たのである。風流の極致は實に此處である。彼が風流の道に於て徹底し得たる如く、吾等の人生に對する考へが徹底するならば、吾等は如何なる地位に身を置くとも、所謂悠々自適の態度を以て毎日を過し得べきである。

斯くして人を愛することに大なる悅びを感じ得たものは、自分の努力が少しなりとも世間の役に立つ事を大なる樂みと感じ得べきである。自分の努力が無駄ではないといふ感じは、卽ち自分は孤立してゐるのではない、自分は多くの人と共に大なる神の力の中に活きて居るのであるといふ感じである。之に換ふべき樂みはない筈である。佛敎に於ては四無量心といふことが敎へられてある。卽ち吾等が世に立ち人に對する際に、いつも此四事を念としなければならぬので、此四心よりして生ずる功德は無量である故に四無量心といふのである。而も此四心が揃つて居なければならぬので